

柏原市埋蔵文化財発掘調査概報

1982年度

1983年3月

柏原市教育委員会

は し が き

わか柏原市は、緑豊かな生駒山地、その南麓を、奈良盆地の水を集めて先入蛇行し、大阪平野に流出する大和川、および金剛葛城の山々から流れる石川と、古来より、山紫水明の地として生活環境は素晴らしいものです。

このような、めぐまれた自然と古い歴史や、伝統に培われた貴重な文化的遺産を今日に伝える町として柏原市は知られています。

なかでも、祖先の人々の生活の記録である埋蔵文化財の包蔵地が全市域の80%を占めており、これら埋蔵文化財包蔵地の発掘調査により、先史から中世にいたる先人の足跡が明らかにされつつあります。

この調査概要報告書は、昭和57年度中に市内の埋蔵文化財包蔵地において実施した柏原市内遺跡群発掘調査のまとめです。

これらの調査については、関係各位から郷土柏原の地に対する深いご理解とご協力をいただきました。文化財の保護を根底にした、「郷土愛」推進の一助を本書が荷なうことを願っています。

近年、柏原市のように生活環境にめぐまれた地域では、都市化が進む中で、こうした文化遺産が急激な速度で失われてゆく状況です。しかし、現在に生きるわれわれは、子孫に対しこれらの文化遺産を保護し、伝承して行く義務を負っていることを忘れてはならないものと考えます。

昭和58年3月

柏原市教育委員会

例 言

1. 本書は、柏原市教育委員会が、国庫補助事業（総額8,000,000円）、国補助率50%、府補助率25%、市負担率25%）として計画し、社会教育課文化財担当が実施した、柏原市内遺跡群緊急発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、柏原市教育委員会社会教育課、竹下 賢、北野 重、花田勝広、安村俊史を担当者とし、昭和57年4月1日に着手し、昭和58年3月31日をもって終了した。
3. 本書には、文化財保護法第57条の2に基づく、届け出があったもののうち、個人住宅建設に伴う事前調査の概要を記載している。
4. 調査の実施と整理にあたっては、以下の諸氏の協力をえた。

広岡 勉	山内 都	大塚 淳子	西原 清美	米谷 厚子	松田 光代
松岡由紀子	菊野 絹子	石田 成年	村口ゆき子	寺内 信子	佐藤 尚
山中 茂	井宮好彦	上條 裕典	山下 裕司	森沼敏則	丸本 周生
坂井 利和	石井敏裕	竹下典江	竹下 彰子	森岡 弘子	蜂谷 直子
高橋いね子	奥野 清	道 護 甚 蔵	井上岩次郎	森口 喜信	谷口 鉄治
麻 栄 三 郎	川端長三郎	朝田 行雄	山田 貞一	分才 春信	西岡 武重
玉野 正	岸本重夫	山本 芳一	杉田 茂		(順不同、敬称略)
5. 本書の監修は竹下賢が担当した。巻末に「まとめ」として、市内遺跡群の時期、性格、広がり等について、担当者による討議結果を取録した。
6. 本調査にあたっては、写真、実測図などを記録して残すとともに、カラースライドを作成した。広く利用されることを願うものである。

目 次

は し が き

例 言

1982年度柏原市内発掘調査一覧..... 1

山ノ井・平野遺跡

・ 82-3 次調査 (山ノ井遺跡) 5

・ 81-1 次調査 (平野遺跡) 5

大泉遺跡

1. 81-7 次調査 6

2. 82-4 次調査 10

大泉南遺跡

・ 81-3 次調査 18

安堂遺跡

・ 81-4・5 次調査 19

鳥取千軒遺跡

・ 82-1 次調査 28

田辺遺跡

1. 81-9 次調査 29

2. 82-3 次調査 33

3. 82-4 次調査 33

4. 82-5 次調査 36

5. 82-6 次調査 39

玉手山遺跡

1. 81-3次調査	43
2. 82-3次調査	44
3. 82-5次調査	48
4. 82-6次調査	58
5. 82-10次調査	69
6. 82-11次調査	76
7. 82-12次調査	80

船橋遺跡	85
------	----

まとめ	87
-----	----

柏原市内遺跡地図	93
----------	----

1982年度柏原市内発掘調査一覧(但し、1981年12月21日から1982年12月31日までの調査)

本郷遺跡

年・次	所在地	面積㎡	申請者	用途	区分	担当	調査期間	備 考
82-1	本郷5丁目200-1・201-1	460	北は八郎	工場建設	国庫	安村	4.27	1.5×1.5mのトレンチを2ヶ所設定し、地表下2mまで掘削したが、遺構遺物の存在はなかった。

山ノ井遺跡

82-1	平野地内	476	近鉄電気通信局	管線埋設	原因者	北野	7.6-8.31	調査区域は、平野遺跡にまでわたる。遺跡敷・杭列・木道を検出。弥生時代から歴史時代の遺物が出土。
82-2	法善寺4丁目	200	関西電力	配電管線埋設	原因者	北野	9.2-18	断面観察により、遺物包含層と遺構面の存在を確認。弥生土器・土師器・須恵器が出土。
82-3	山ノ井町720-5	156	早川 勇	集会所建設	国庫	花田	8.26	本書5ページ参照。

平野遺跡

81-1	山ノ井町570-7	331	飯内 秀晃	個人住宅建設	国庫	花田	2.12	本書5ページ参照。
------	-----------	-----	-------	--------	----	----	------	-----------

大県遺跡

81-7	平野1丁目61 1	367	高井敏行	個人住宅建設	国庫	北野	81.12.21-26	本書6ページ参照。
81-8	大県4丁目91-213	299	柏原市建設部	下水道管埋設	原因者	北野	1.25-2.9	『大県・大県西・安堂遺跡-下水道管敷設工事に伴う-』1983年柏原市教員会 参照。
81-9	平野2丁目395	206	峯 秋次	個人住宅建設	国庫	北野	3.16	地表下1.8mまで掘削したが、遺構遺物の存在は認められなかった。
81-10	平野1丁目32 4	198	中野美智子	倉庫建設	国庫	安村	3.27	1.8×2.8mのトレンチを設定し、地表下2.0mまで掘削したが、遺構・遺物の存在は認められなかった。
82-1	大県4丁目168	199	山中 信男	個人住宅建設	国庫	花田	5.18	2×2mのトレンチを設定し、地表下1.5mまで掘削。遺構は検出されず。土師器・須恵器・瓦器の破片が少量出土。
82-2	大県3丁目98-3	114	北橋 昭治	個人住宅建設	国庫	花田	10.14-15	2×2mのトレンチを設定し、地表下2.2mまで掘削したが、遺構・遺物の存在は認められなかった。
82-3	大県4丁目164 1	665	塩野 安雄	個人住宅建設	国庫	北野	11.12-13	2.0×2.0mのトレンチを設定し、地表下2.0mまで掘削したが、遺構は検出せず。時期不明の遺物が少量出土。
82-4	平野2丁目388-1・2-12	222	本 田 イト	個人住宅建設	国庫	花田	11.9-20	本書10ページ参照。

大県南遺跡

年次	所在地	面積㎡	申請者	用途	区分	担当	調査期間	備考
81-2	太平寺2丁目1-2	352	柏原市建設部	下水道管埋設	原因者	北野	1.8~2.18	『大県・大県南・安堂遺跡—下水道管埋設工事に伴う』1983年柏原市教育委員会 参照。
81-3	大県3丁目349-2	147	佐竹 勉	個人住宅建設	国庫	花田	2.10	本書18ページ参照。
82-1	大県4丁目474他	2,000	高井 養産	宅地造成	原因者	花田	5.6~7.31	6世紀末の古墳、及び、山ノ下寺跡を検出。土師器・須恵器・瓦葺・瓦・有る尖頭器が出土。
82-2	大県4丁目213他	420	柏原市	道路幅拡張	原因者	花田	8.6~12 11.1~8	5ヶ所にトレンチを設定し掘削。遺構の検出はできなかったが、7世紀代の土師器・須恵器が出土。
82-3	大県3丁目432-1	445	山下 忠光	個人住宅建設	国庫	北野	9.16	地盤下2.0mまで掘削したが、遺構・遺物の存在はなかった。
82-4	大県4丁目246	349	辻井 豊	個人住宅増築	国庫	安村	12.25	1.5×3.0mのトレンチを設定し、地盤下1.8mまで掘削したが、遺構は検出せず、土師器、須恵器の破片が出土。

安堂遺跡

81-4	安堂町936-1 安堂町936-2 940-8	75 76	樋用 正彦 深川 清利	個人住宅建設	国庫	花田	1.10	本書19ページ参照
81-5	安堂町936-1	74 113	大下 成一 高見 企業	個人住宅建設	国庫	花田	1.20	本書19ページ参照。
81-6	安堂町964-1 ~663-1	110	柏原市建設部	下水道管埋設	原因者	安村		『大県・大県南・安堂遺跡—下水道管埋設工事に伴う—』1983年柏原市教育委員会 参照。

高井田横穴群

82-1	大字高井田107-1他	194,000	高井田十地区画組合	土地区画整理	原因者	北野	8.17~9.8	『高井田十地区画整理事前試掘調査報告書』1983年 柏原市教育委員会 参照。
------	-------------	---------	-----------	--------	-----	----	----------	--

雁多尾畑古墳群

82-1	大字青谷827他	6,625	関西 寛力	幹線新設	原因者	竹下 安村	4.1~7.31	鉄塔設置場所7ヶ所を掘削、横穴式石室2基を断らたに発見し、相伴する土師器・須恵器・鉄釘等が出土した。
------	----------	-------	-------	------	-----	----------	----------	--

鳥取千軒遺跡

82-1	大字青谷270-6	165	松岡 年雄	個人住宅建設	国庫	安村	5.27~31	本書28ページ参照。
------	-----------	-----	-------	--------	----	----	---------	------------

田辺遺跡

81-9	田辺2丁目1231-39	129	浅田 政宏	個人住宅建設	国庫	北野	2.25~26	本書30ページ参照。
82-1	国分本町7-1988	40,896	山下 健彦	分譲住宅建設	原因者	竹下 花田	2.25~4.27	2,100㎡を掘削し、7世紀前半~8世紀中頃の古墳19基と古瓦10基を検出。田辺一駅の墓域と考えられる。

年・次	所在地	面積㎡	申請者	用途	区分	担当	調査期間	備 考
82-3	田辺1丁目1017	257	植山 一郎	個人住宅建設	国庫	安村	5.20	本書33ページ参照。
82-4	田辺2丁目2-9	156	松池照男	個人住宅建設	国庫	安村	5.20~22	本書33ページ参照。
82-5	国分本町7丁目1965-2他	987	前川繁太郎	分譲住宅建設	民間者	北野	5.6~30	400㎡を掘削し、6~7世紀の住居跡・土坑等の遺構を検出。土師器・須恵器・磁石等が出土した。
82-6	田辺1丁目2046 2047	79	春日神社	山車収蔵庫建設	国庫	安村	5.31~6.8	本書36ページ参照。
82-7	田辺2丁目1231 ~1241	106	山之ト忠一	個人住宅建築	国庫	安村	6.14~19	本書39ページ参照。
82-8	田辺2丁目1231 13	133	宮崎軍一郎	個人住宅建設	国庫	竹下広剛	8.6	2×2mのトレンチを4ヶ所設定し、地表下0.5~1mまで掘削。時期不明の落ち込みを検出。土師器片が少量出土。
82-9	国分西2丁目330 1千歳の木	736	谷口 健 詩	個人住宅建設	国庫	安村	8.17	2×4mのトレンチを設定し、地表下2.5mまで掘削。遺構・遺物の存在は認められなかった。

玉手山遺跡

81-3	玉手町7丁目	163	玉手山遊園地	展示場建設	民間者	竹下	1.6	本書43ページ参照。
82-1	旭ヶ丘1丁目587-550-51	495	辰巳正夫	個人住宅建設	国庫	北野	4.13	2.0×2.1mのトレンチを設定し掘削。地表下1.2mのところで包含層を確認。遺構は検出せず。土師・須恵器片少量出土。
82-2	旭ヶ丘1丁目376-1	898	辰巳工務店	分譲住宅建設	民間者	北野	4.20~5.6	5×20mのトレンチを設定し掘削。8世紀の高遺構とそれに伴う遺物を検出。
82-3	片山町8-4・5・6	495	西村 公 秀	診療所及個人住宅建設	国庫	安村	5.11~19	本書44ページ参照。
82-4	片山町10	92	柏原市水道局	上下水道管埋設	民間者	安村	4.1~24	『片山廃寺跡跡発掘調査概報』1983年 柏原市教育委員会参照。
82-5	玉手町149-7	144	半田 武 夫	個人住宅建設	国庫	安村	6.16~21	本書48ページ参照。
82-6	玉手町149-2・4・5 玉手町149-6	253 77	高田 義 幸 今 益 義 典	個人住宅建設	国庫	北野	6.22~7.2	本書58ページ参照。
82-7	旭ヶ丘2丁目240-9	132	井 宮 一 男	個人住宅建設	国庫	安村	6.29~30	2×6mのトレンチを設定し掘削。地表下0.8mで地山を確認。遺構・遺物の存在はなかった。
82-8	旭ヶ丘1丁目446-1	264	山 本 浩 二	個人住宅建設	国庫	安村	7.26~28	1.5×8.0mのトレンチを設定し掘削。地表下1.3mで地山を検出。遺構・遺物の存在はなかった。

年・次	所在地	面積 m ²	申請者	用途	区分	担当	調査期間	備 考
82-9	片山町192-2	136	尾野 清	個人住宅 建設	国 庫	花田	9.13	2×2mのトレンチを設定し、地表下1.2mまで掘削。透視は検出せず。取土等細片、サヌカイト割片少量出土。
82-10	片山町14-18他	1,267	カネイナ ビル	分譲住宅 建設	原因者	花田	8.30-9.16	本書69ページ参照。
82-11	円明町217-69	1,506	北部柏原工 業団地協同 組合	共同施設 建設	国 庫	安村	9.28-10.6	本書76ページ参照。
82-12	旭ヶ丘・円明町	44,828	東洋 鉛業	宅地造成	国 庫	安村	10.7- 11.27	本書80ページ参照。

山ノ井・平野遺跡

山ノ井遺跡

82-3次調査

- ・調査地区所在地
柏原市山ノ井町720-5
- ・調査担当者
花田勝広
- ・調査期間
1982年8月26日
- ・調査面積
4 m²/156m²

調査は、対象地の中央に2×2mの試掘壕を設定し、現地表下1.8mまで掘削した。層序は、地表下1.8mまで暗灰色砂質土が堆積し、下層に青灰色砂質土が検出された。遺物は、現代のもので出土しただけであった。近年まで溜池であったことが認められる。



図-1 調査地区附近地図

平野遺跡

81-1次調査

- ・調査地区所在地
柏原市山ノ井町570-7
- ・調査担当者
竹下 賢・花田勝広
- ・調査期間
1982年2月11日
- ・調査面積
4 m²/330m²

調査区は、現平野集落の南側に位置し、旧170号線から東へ30m、遺跡の中心にあたる平野変電所から北へ110mの地点である。調査は、2×2mの試掘壕を設定し、現地表下2.5mまで掘り下げた。遺構は検出されず、最下層の青灰色粘質土から弥生土器の細片が出土した。

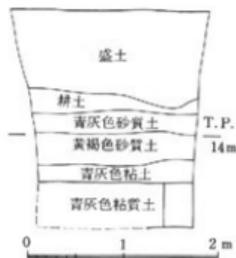


図-2 土層断面図

大 県 遺 跡



図-3 調査地区附近地図

1. 81-7次調査

- ・調査地区所在地 柏原市平野1-61-1
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 1981年12月21～26日
- ・調査面積 11.7㎡/367㎡

当調査区は生駒山地の山裾に形成された扇状地の中央部に位置する。山添いを走る旧国道170号線（東高野街道）からは約30m程西へ寄った地点である。

従来の調査から、当地区付近では遺構面の確認がかなりの深さに及ぶことが予想された。また、調査可能面積の狭小さもあって、環境復元を主な目的として調査に入った。

発掘調査は、2.0×2.0m・3.5×2.2mの2本のトレンチを設定して実施した。

第1トレンチでは、表土、耕作土の除去後に土師器、須恵器の細片を含む茶褐色粘質土が認められ、この遺物包含層を切る形で、円形のビットが2つ検出された。それぞれ径35cm、深さ10cm、径50cm、深さ20cmを測る。ビット内から遺物は発見されず、その時期、性格などは判明

しなかった。

さらに、この茶褐色粘質土を掘削後、トレンチの西半分が深さ20～30cmにわたって落ち込んでいる状況が認められた。この落ち込みの一边はトレンチ中央をほぼ南北に走っている。落ち込み内の埋土は2層に分けられ、上層が茶灰褐色砂質土、下層は厚さ約10cmの灰褐色粘土である。

茶灰褐色砂質土中より、後述の弥生土器が検出されたが、須恵器や土師器片の出土もあり、この落ち込みの時期、性格を明確にするには至らなかった。

第2トレンチは第1トレンチと同様な土層の堆積状況を示し、遺構は認められなかった。

出土遺物のおもなものは弥生土器が4点のみである。

1・2は広口壺である。1はラッパ状にひろく口頸部を持ち、口縁端部を下方に拡張する。外面調整はハケ目の後、丁寧なナデで仕上げている。2は口縁部が大きく外反し、口縁端部には2条の擬凹線を施す。3は口縁部を叩き出して成形した甕で、口縁の上半部は受け口状に立ち上がっている。外面調整は細かなタクキ目である。4は小型の鉢である(完形)。逆円錐形の体部に小さな底部が付く。底部はドーナツ状を呈し、側面を指で押えている。口縁部はやや薄くなり、そのまま終る。体部外面はタクキ目を施した後、丁寧にナデで消している。内面はハケ目の後、ナデで仕上げている。これらはいずれも弥生時代後期に含まれるものと考えられる。

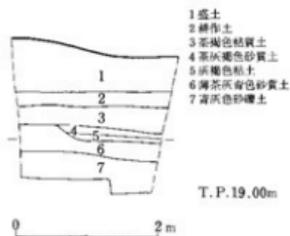
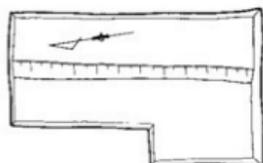


図-4 第1トレンチ遺構図

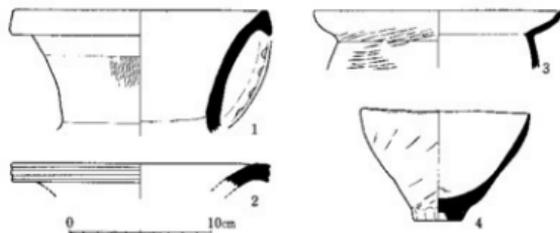


図-5 第1トレンチ出土弥生土器実測図



第1トレンチ（南側から）



同遺物出土状況（東側から）



第2トレンチ (南側から)



1



4

第1トレンチ出土土器

2. 82-4 次調査

- ・調査区所在地 柏原市平野 2-388-1、2
- ・調査担当者 花田勝広
- ・調査期間 1982年11月9日～15日
- ・調査面積 16㎡/222㎡

調査概要

調査は、住宅建設予定地の西南に4×4mの試掘壕を設定し、現地表下2mほど掘り下げた。遺構面は、2面あり、暗茶褐色砂質土上面(第1遺構面)、淡黄褐色砂質土上面(第2遺構面)より、ピット・柱穴・溝址が検出された。

第1遺構面

試掘壕西辺で東西に伸びる幅80cm、深さ15cmの溝1本を検出した。時期は、相伴遺物がなく不明である。茶灰色砂質土内からは、土師器・瓦質土器・須恵器と暗茶褐色砂質土より、攪乱により混入したと考えられる縄文土器・弥生土器が出土した。包含層の時期は、遺物から6世紀～15世紀頃と考えられる。

第2遺構面

遺構は、獨立柱建物址に伴う柱穴(1～3)、ピット2ヶ所、土壇1ヶ所を検出した。

獨立柱建物址は、柱穴の配置から建物の東南部分と思われる。柱穴間は、柱穴1と柱穴2の間が、約2m、柱穴2と柱穴3の間が、約1.8mである。時期は、柱穴内より第3様式の弥生土器が出土しており、弥生時代中期頃と考えられる。他のピット2ヶ所は、共に

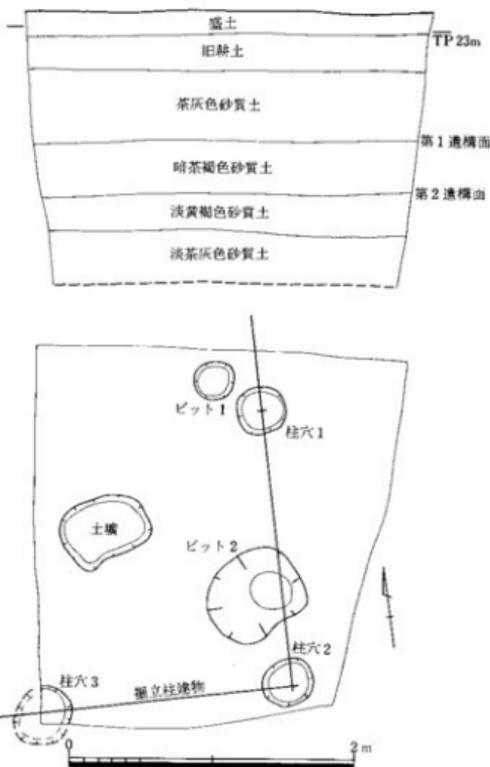


図-6 遺構図

深さ50～60cmを測り、ピット内より縄文土器が出土している。

遺構に伴う包含層である暗茶褐色土層からは、縄文土器（4～42）・石器（43～44）・弥生土器の細片が出土した。また、土壌の埋土より石器（50）が出土した。包含層の時期は、縄文時代後期から、弥生時代中期頃と考えられる。

淡黄褐色砂質土から、縄文時代早期の土器（1～3）とサヌカイトの剥片が出土した。

遺物

縄文土器（図-8～10）

縄文土器は、合計96点出土し、図示したのは42点である。時期は、早期のもの（1～3）、後期のもの（4～34）・晩期のもの（35～42）があり、後期のものの出土量が多い。

①は、押形土器で、外面に4～5本を単位とした回転山形文を施す。回転方向は、全て横方向である。口径は、推定復元すると28cm前後で、波状口縁を呈すると思われる。②・③は、①と同一胎土・手法であることから、同一個体と考えられる。③は、尖底の底部に近い部分である。

④は、比較的大きく開いた口縁部内面に1.3cmほど肥厚した平坦部をつくり、太い竹管による沈線で文様を施している。胎土は、石英・長石を多く含み、灰白色を呈する。外面は、縦方向に垂下条線を施文する。⑥・⑧・⑩・⑪・⑫は、磨消縄文の文様を有する土器群である。⑤は、口縁部を丸くおさめた後、端部外面に縄文を斜めに施す、いわゆる縁帯土器である。胎土は、長石・石英・角閃石を多く含む。⑦は、口縁部を肥厚させ、縦方向の太い沈線を施す。

⑧・⑨は、縄文を施した後に沈線を入れる。縄文の捻系は、比較的細かい。⑩は厚手で胎土中に角閃石・雲母を含まず、色調も黄灰色を呈している。文様は、太く浅い沈線で三角形に区画する。⑬は、いわゆる羽状縄文で、縄文を施した後に沈線を横方向に入れる。⑭・⑮は、同一個体で比較的薄い土器で、縦方向に3条の沈線をへら描きで施す。内面は、かるいへらケズリの後にナデを行う。⑯は、垂下条線を一定方向に施す。口縁端部内面は肥厚させ、縄文を施した後に2本の沈線を横方向に入れる。⑰は、口縁部が直立し、端部を丸くおさめ体部がやや張るとされる鉢である。文様は、口縁部と体部に縄文を施した後に、頸部の縄文をナデ消す。

⑱は、口縁部外面を二枚貝の腹縁で調整する。端部断面は、三角形を呈する。⑲・⑳・㉑は、同一個体で、口縁部外面に垂下条線があり、山形をなすと思われる。文様は、縦方向に垂下条線を描状原体で施す。内面は、かるいへらケズリの後にナデ消す。胎土は、大粒の長石・石英・雲母・クサリ礫を含む。㉒は、外面に垂下条線を施す。胎土は、0.1mm以内の少量の雲母、長石、石英を含む。色調は、暗茶褐色を呈する。㉓は、口縁上部に3本の沈線を有し、内外面をへらミガキで調整する。㉔は、外面に縦方向に太いへら描き沈線で波状文様を施す。

条痕調整の土器は、粗製の深鉢と浅鉢があり、原体も二枚貝条痕のもの（㉕・㉖・㉗・㉘・㉙・㉚・㉛・㉜）と巻貝条痕のもの（31）がある。深鉢は、外反する口縁部のみで、形態

の明らかなものはない。

晩期の粗製深鉢は、「く」字状に外反した口縁部を持ち、体部をヘラケズリで調整しているものがある。㉔は、口縁端部にキザミ目があり、波状口縁を呈すと思われる。文様は、口縁部から体部に縦方向の瓜形文を施す。㉕は、精製の深鉢で口縁部に一条の沈線を施した後、赤色塗料を沈線内に塗る。内外面は、ヘラミガキを行い、薄くて胎土も良質である。㉖は、変形土字文を有する浅鉢である。胎土は、角閃石・長石・石英を含む。粗製の深鉢は、口縁部や体部の凸帯にキザミを有するもの(38・41)と持たないもの(39・40・42)がある。

石器(図-7)

種類は、石鏃(43-45)、石槍(46)、石匙(48)、石匙木製品(49)、用途不明の石器(47・50)と剥片がある。材質は、全てサヌカイトである。

㉓・㉔は、凹型無茎式石鏃で、断面形は、扁平な菱形を呈し、非常に薄手である。重量は、共に0.2gであり、縄文時代のもと思われる。㉕は、凸基有茎式石鏃で、全長4.8cm、重量0.4gであり、弥生時代中期のもと思われる。㉖は、石匙の完形品で重量が6gある。㉗は基部が付いており、石匙の未製品と考えられる。

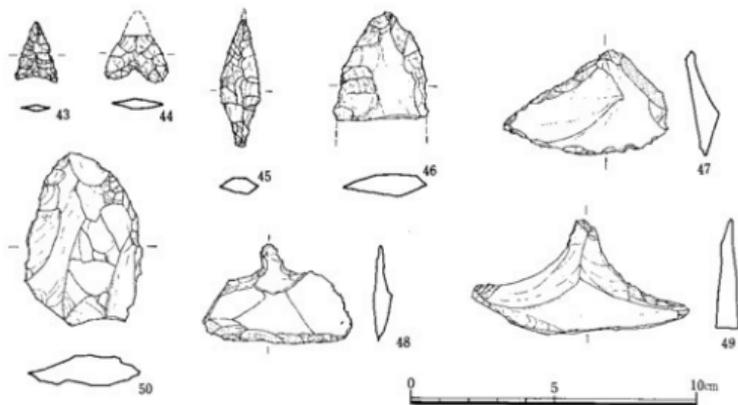
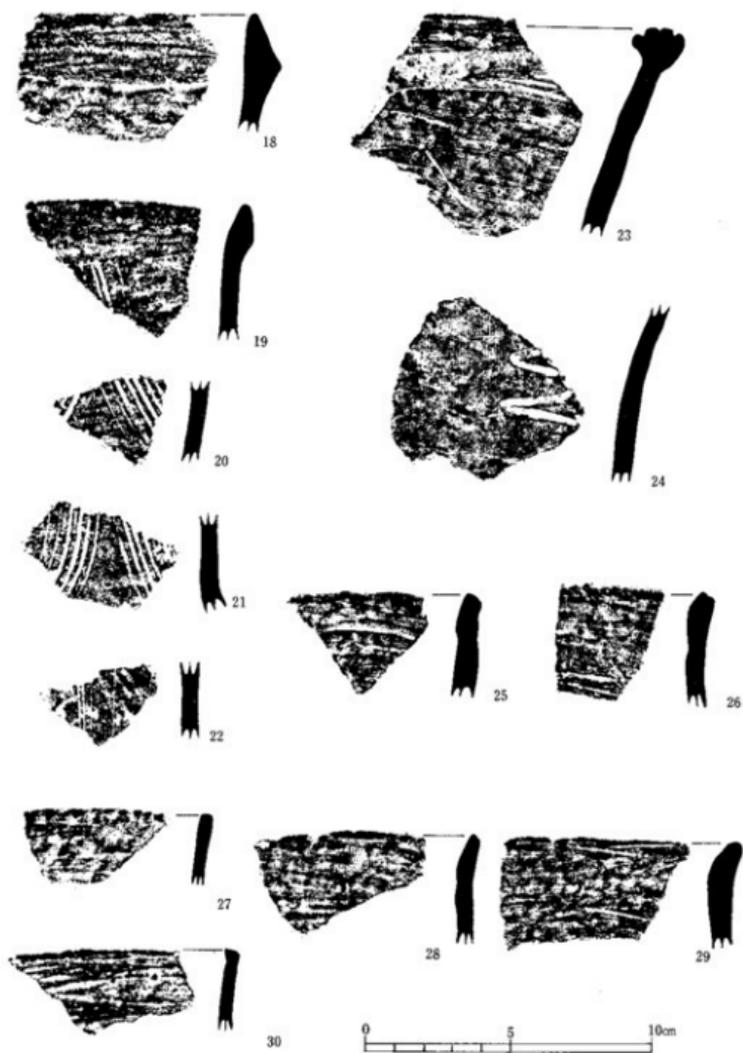


図-7 石器実測図



圖-8 繩文土器拓影



圖一 九 繩文土器拓影

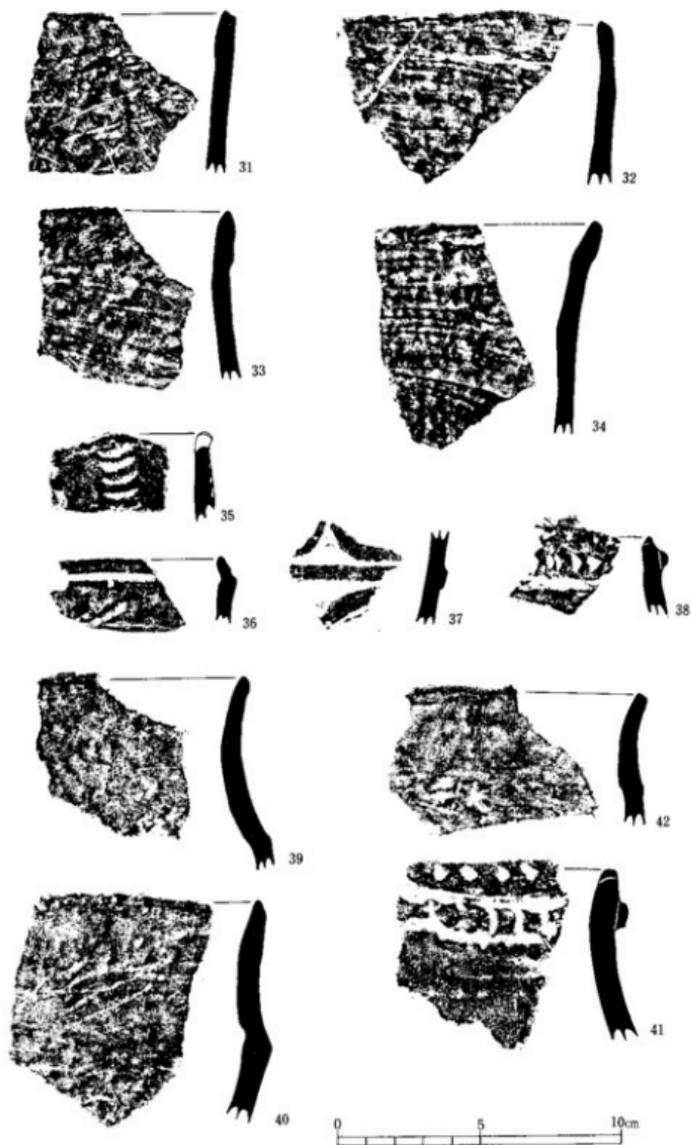
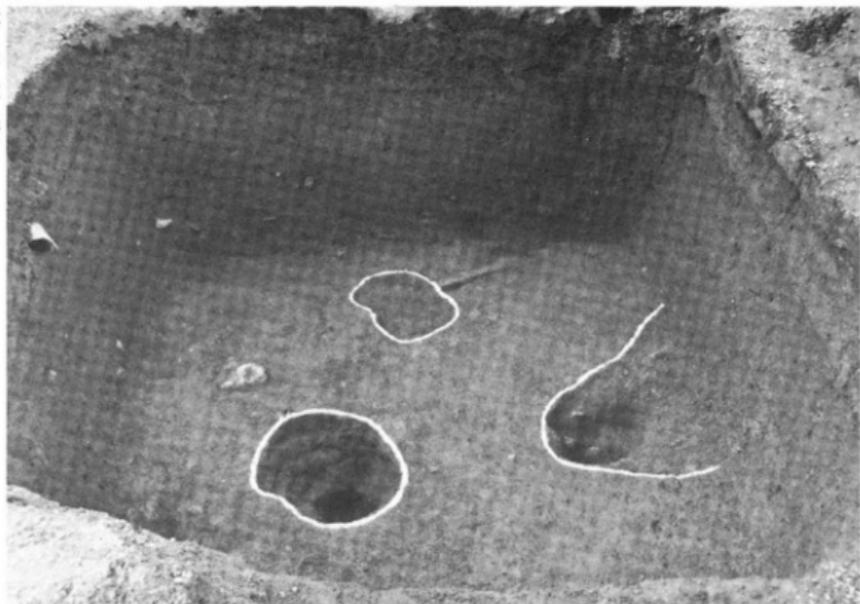
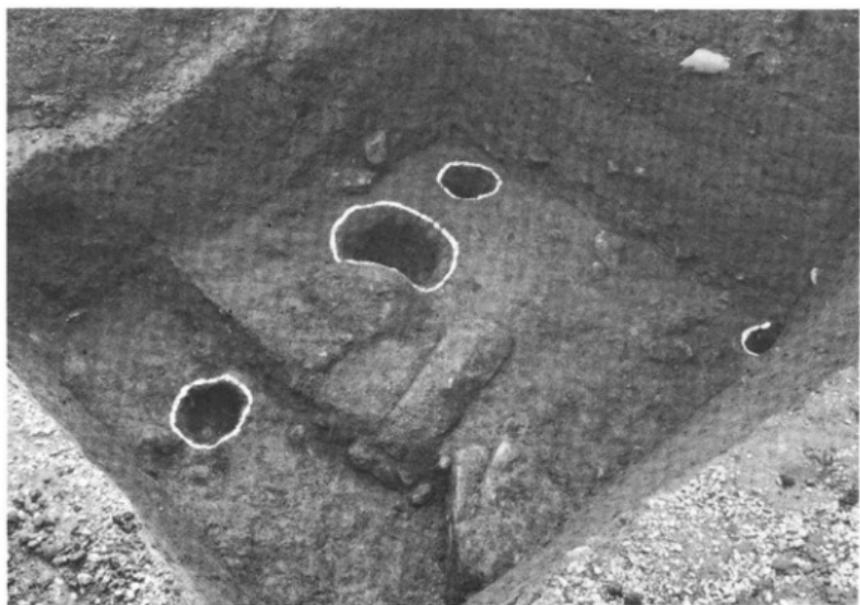


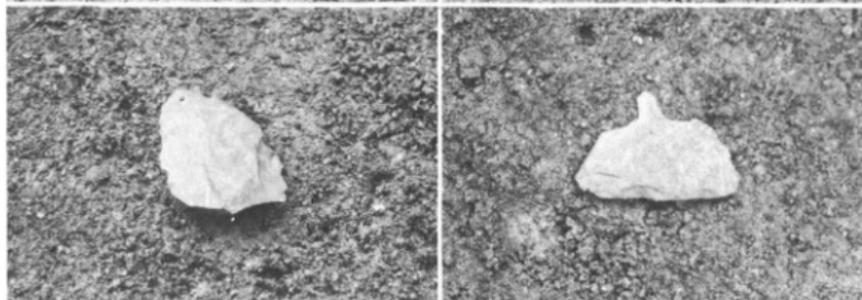
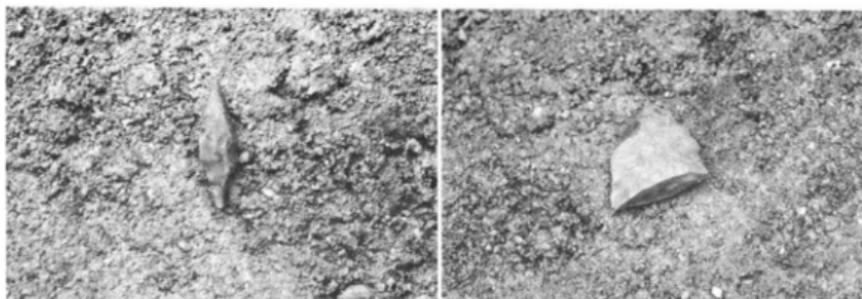
图-10 繩文土器拓影



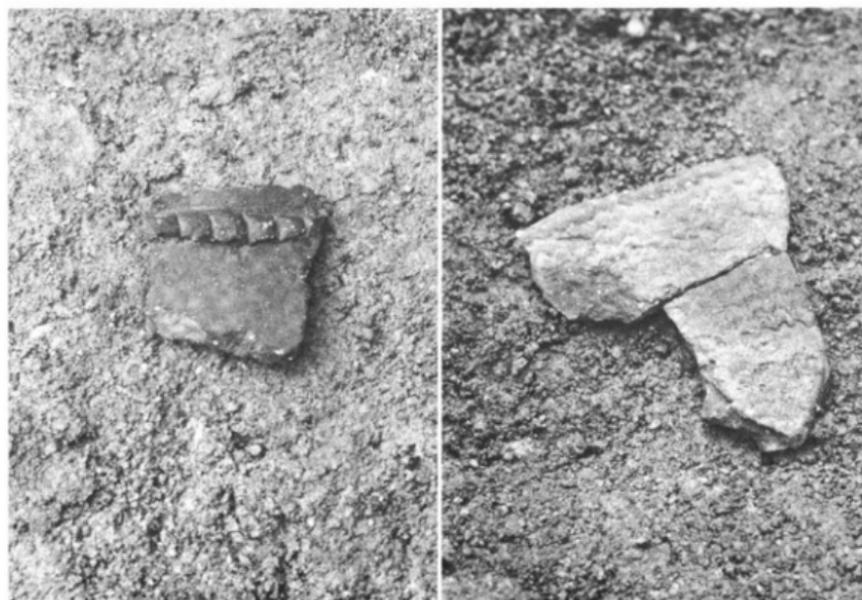
調査区全景（南側から）



調査区全景（南西側から）



遺物出土狀況



遺物出土狀況

大 泉 南 遺 跡

81-3 次調査

- ・調査地区所在地
 柏原市大泉3-349-2
- ・調査担当者
 竹下 賢・花田勝広
- ・発掘調査期間
 1982年2月10日
- ・調査面積
 3 m²/73m²



図-11 調査地区附近地図

調査は、住宅建設予定地の浄化槽設置部分に1×3 mの試掘溝を設定して実施し、現地表下2.5 mまで掘り下げた。遺構は、灰褐色砂泥土上面で南北方向に伸びる溝を一本検出した。溝は、幅50cmを測り断面U字形を呈する。溝肩部の東側に12本、西側に4本の杭の跡が残る。

遺物は、溝内から少量の瓦器片と、須恵器・土師器の細片が出土した。溝の時期は、出土した瓦器片から鎌倉時代と考えられる。

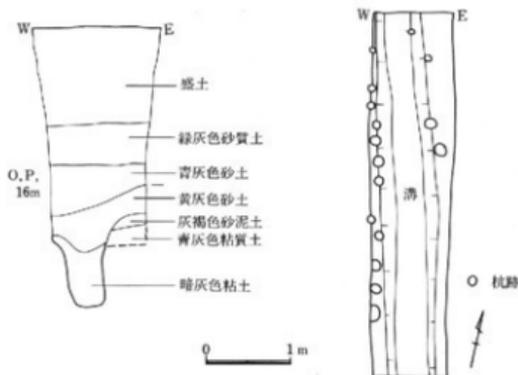


図-12 遺構図

安堂遺跡

81-4・5次調査

- ・調査地区所在地
柏原市安堂町931-1他
- ・調査担当者
竹下 賢・花田勝広
- ・発掘調査期間
1982年1月10～11日・29～30日
- ・調査面積
14㎡/337㎡



図-13 調査地区附近地図

調査概要

調査は、個人住宅建設予定地4軒を2次に分けて実施した。第1・2・3調査区はそれぞれ2×2m、第4調査区は1×2mの試掘坑を設定した。

第1調査区

層序は、上層より盛土・耕土・床土・暗茶褐色砂質土・灰褐色砂質土の順で堆積している。遺構は、床土下の暗茶褐色砂質土上面から南北に走る溝が一本検出され、土管9本が埋設してあった。溝の時期は不明であるが、土管から推察して近世以降と考えられる。他に、暗茶褐色土内から須恵器・土師器の細片が少量出土した。

第2・3調査区

層序は、上層より盛土・耕土・床土・暗茶褐色砂質土が堆積し、黄褐色砂質土上面で、土塊と、ビット群を検出した。土塊は、第3調査区南側に位置し、深さ70cmを測る。埋土層は、淡褐色土・明褐色砂質土で須恵器(25)・埴輪(28・29)が出土した。ビット群は、明らかに柱穴であり、ビット3より瓦器片・陶器(21)



図-14 発掘調査区

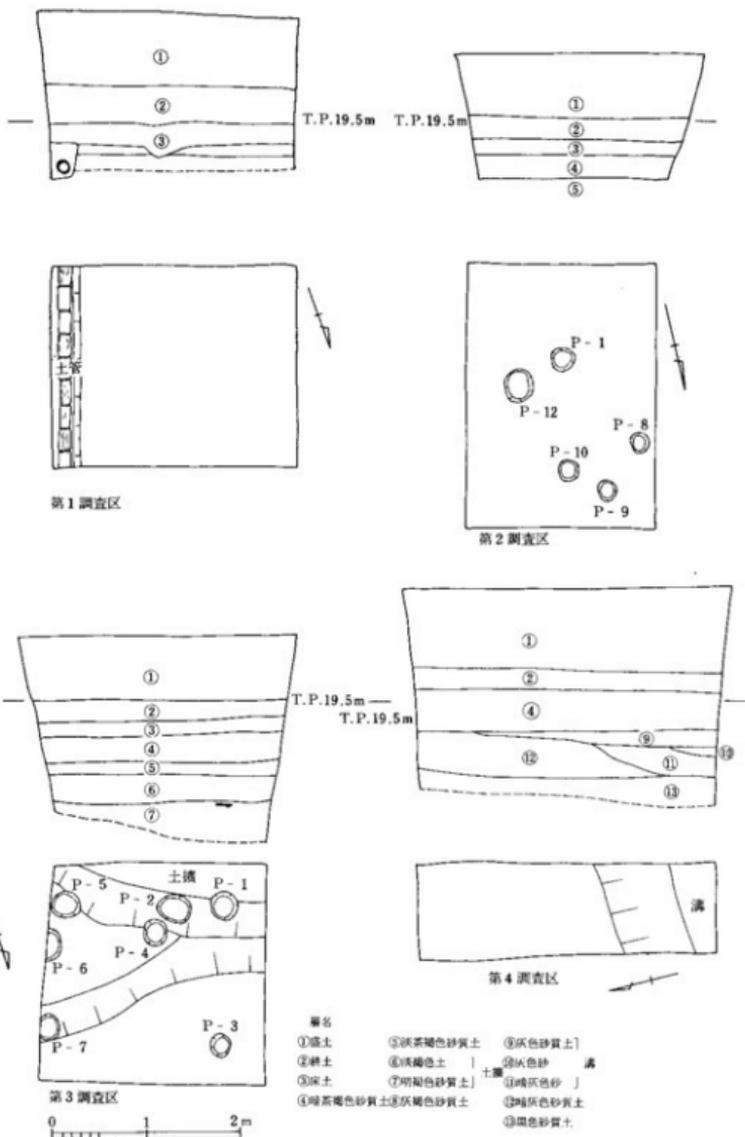


圖-15 第1~4区調査区遺構図

・土師器(19・20)が出土しており、鎌倉時代と考えられる。包含層の暗茶褐色砂質土からは須恵器(22・23・24)・土師器(26・27)・石器(30)・平瓦片が、出土した。

第4調査区

層序は、盛土・耕土・暗茶褐色砂質土で、第2・3調査区とはほぼ同様の堆積である。遺構は、暗灰色砂質土上面で溝1本を、検出した。溝の埋土は、上層より灰色砂質土・灰色砂・暗灰色砂である。遺物は、暗灰色砂層から瓦器(1~18)が、約20個体ほど出土した。溝の年代は、土器より、11世紀末~12世紀頃と考えられる。溝は、深さ50cmほどで比較的浅い。

出土遺物

遺物は、石器・埴輪・須恵器・土師器・瓦器・陶器・瓦があり、遺構に伴うものは、第4調査区の瓦器(1~18)と第3調査区のビット3の陶器(21)・土師器(19・20)のみである。他は、全て包含層より出土しており、詳細な検討は次の通りである。

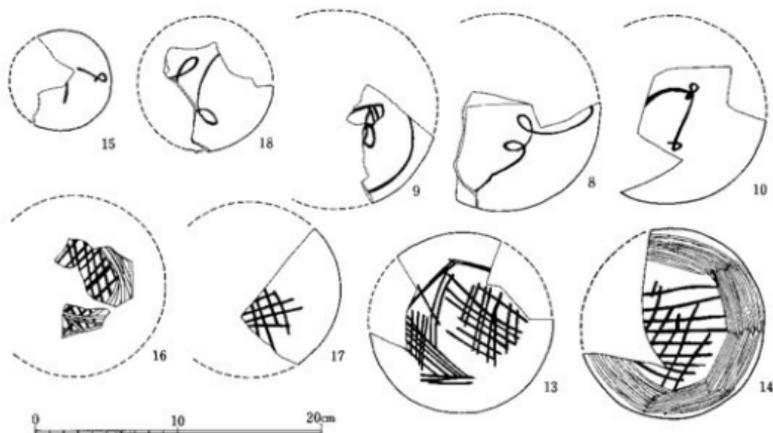


図-16 瓦器の暗文

瓦器(図-16・17)

和泉製の、椀15個体、他に小型椀1個体、皿2個体が出土した。椀類は、形態や見込みの暗文によって、I類・II類に大別し、さらに口縁部やヘラミガキによって、それをa・b・cに細分することができる。

I a類 暗文がなく口縁部が直立し、内外面共にヘラミガキを密に施すもの(1)。

法量は口径16.9cm・器高6.5cm・高台径7.6cmを測る。見込みに平行ヘラミガキを施した後、ゆるやかな傾斜をもつ放射状の不規則なヘラミガキを一方向から、密に行なう。外面には、不

安 規則なヘラミガキを密に施す。口縁部はヨコナデの後に下方に沈線を巡らす。色調は内面黒色、
章 外面漆黒色で、器壁は6mmと厚く、胎土は良質粘土を用いる。

遺 I b類 暗文がなく口縁部が強いナデで外反気味なもの(2~7)。

跡 ②は、口径16.7cm・器高6.2cm・高台径6.1cmを測る。色調は黒灰色で、胎土は灰白色で精良である。③は、口径15.4cm・器高5.9cm・高台径6.7cmを測る。内面は、間隔のあく不規則なヘラミガキを施す。外面には、ヘラケズリを行った後に不規則なヘラミガキが施され、体部および口縁部には、細かい指圧痕が残る。色調は黒灰色。胎土は灰白質で精良。④は、口径15.1cm、器高6.1cm、高台径6cmを測る。内外面は、ヘラミガキが施され、見込みに格子暗文がある。外面には、太いヘラミガキを渦巻状に丁寧に施す。色調は黒灰色で、口縁内面の一部は黒色を呈する。胎土は灰白色で、精良である。⑤は、口径15.2cm、残存器高5.6cmを測り、高台を欠損している。内面は、不規則なヘラミガキが施され、底部外面に指圧痕が残る。体部から口縁部にかけて、太目のヘラミガキを行う。色調は黒灰色で、胎土は灰白色の良質の粘土を用いる。⑥は、口径15.9cm・器高6.0cm・高台径6.3cmを測る。内外面とも磨耗しておりヘラミガキの方向が明瞭でないが、外面はヘラケズリを行った後、ヘラミガキを施す。体部には、指圧痕が若干残る。色調は漆黒色。胎土はほとんど砂粒を含まない。⑦は、口径17.0cm・残存器高6.0cmを測り、高台および底部は欠損している。調整は、内面に不規則なヘラミガキが施され、外面はヘラケズリの後にヘラミガキを行う。口縁部外面は、強いヨコナデを行う。色調は黒灰色。胎土は砂粒をほとんど含まない。

I c類 ラセン状の暗文を施し、口縁部が大きく外反するもの(8~12)。

⑧は、口径15.8cm・器高5.5cm・高台径6.3cmを測る。見込みには、平行ヘラミガキが施され、体部内面には渦巻状にヘラミガキを行なう。見込み中央部から体部にかけて簡略化されたラセン状暗文がある。外面には、太目のヘラミガキを密に渦巻状に施す。色調は黒灰色である。⑨は、口径15.9cm・器高5.8cm・高台径5.4cmを測る。内面は、ヘラミガキを密に行ない、見込み中央部から体部にかけて、連続したラセン状暗文がある。口縁部は、ヨコナデによってかるく外反する。色調は黒灰色で、胎土はほとんど砂粒を含まない。⑩は、口径15.1cm・器高5.9cm・高台径5.6cmを測る。見込みには、不規則なヘラミガキがあり、口縁部に密なヘラミガキが認められる。暗文は簡略化されたラセン文である。⑪は、口径15.4cm、器高5.8cm、高台径5.7cmを測る。見込みに平行したヘラミガキを行ない、体部内面に渦巻状のヘラミガキを施す。外面には、一方向から太目のヘラミガキを密に行なう。色調は、内外面ともに炭素未吸着部分が多いため、黄灰色で所々に黒色を呈する。⑫は、口径16.2cm・残存器高5.2cmを測り、高台および底部は欠損している。内面には、間隔のあいた不規則なヘラミガキを施す。外面には、ヘラミガキを施し、口縁部はヨコナデを行う。色調は黒灰色。

II類 内面に格子状の暗文を有し、口縁部の直立するもの(13・14・16)。

⑬は、口径14.6cm・器高4.9cm・高台径4.7cmを測る。内面中央部に格子目暗文、体部から口縁部にかけては間隔のあく太目のヘラミガキが認められる。外面は、指圧痕が顕著に残り、部分的にヘラミガキを粗雑に行なう。器壁は3mmと薄い。色調は黒灰色。⑭は、口径15.2cm・器高5.3cm・高台径5.7cmを測る。内面中央部には、格子目暗文がみられ、体部には荒い横方向のヘラミガキを施す。口縁部外面には、間隔のあく太いヘラミガキを行ない、指圧痕が顕著に残る。色調は淡灰黒色で器壁は3mmと薄い。⑮は、口径や調整等が不明であるが、かろうじて高台径4.9cmを測る。内面には、見込み中央部に格子目暗文を施す。色調は青味がかった灰黒色。

小型瓦器碗(15)は、口径8cm・器高3.2cm・高台3.8cmを測り、内面全体に太いヘラミガキが渦巻状に施され、見込みには、簡略されたラセン状暗文がある。外面にも太いヘラミガキが密に施され、口縁部はヨコナデによってやや外反する。色調は黒色。

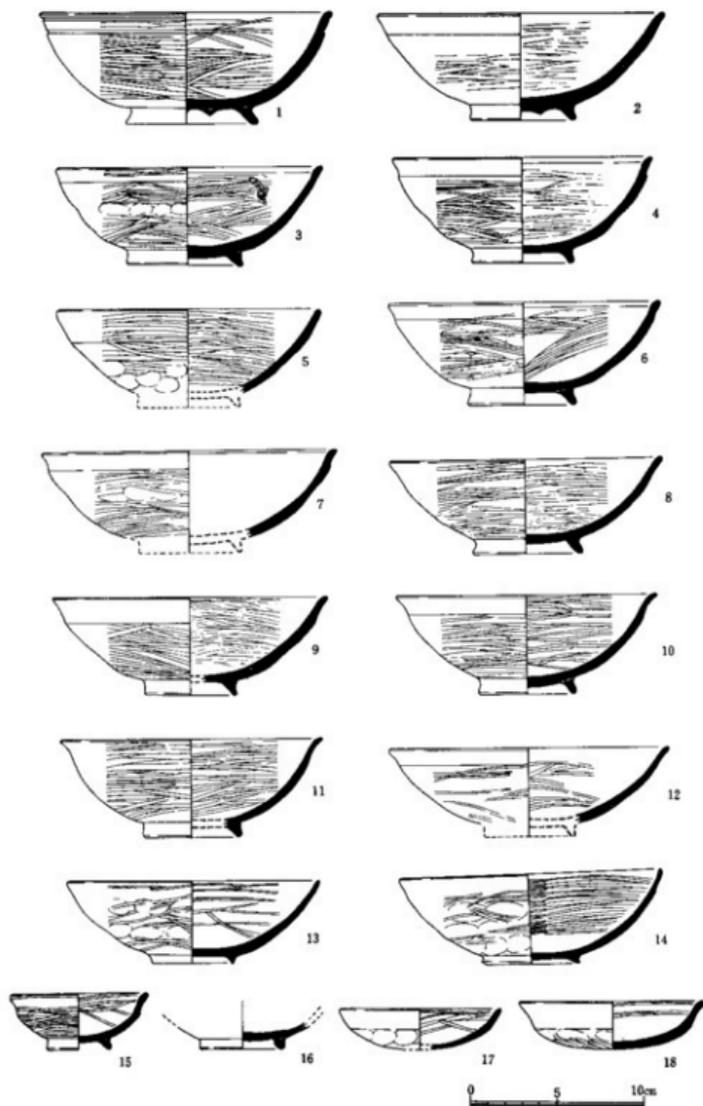
瓦器皿(17・18)。⑯は口径9.4cm・器高2.4cmを測る。内面見込みには、中央部に格子目暗文がみられ、体部に比較的細いヘラミガキを不規則に施す。底部外面には、指圧痕が残り口縁部にナデを行なう。色調は黒灰色、胎土は良質粘土を用いている。⑰は、口径10.8cm・器高2.8cmを測る。底部に丸をもち内湾しながら口縁部につづき、ヨコナデによって外反する。内面の見込み中央部には、ラセン状暗文があり、体部に太いヘラミガキを施す。色調は黒灰色。

柄の高台は、⑬・⑭以外は厚みがあり、外方に張り出し、高台の端部を丸くおさめる。①・②は同様の高台の内側中央に、直径1.7cm、高さ6.3cmの小型の高台が認められる。⑬・⑭は細い断面三角形の高台が付いている。

以上の形式から今回出土した瓦器を時期別に分類すると、I類からII類の順となる。I a類は、出土した瓦器碗の中で特に目立ってヘラミガキが丁寧な施され、重量感もあり、高台も大きく仕上げられ、瓦器碗の中で最も古いものと考えられる。I b類は、高台径が小さくなり、ヘラミガキも雑で、器壁も薄くなる。I c類は、口縁部が大きく外反し、高台もややシャープになり、内面にラセン状暗文を施す。II類は、I類と比べて高台の形は小さく断面三角形で、器壁も大変薄く、内外面のヘラミガキも省略される。小型碗は、ヘラミガキの密度、暗文からI b類と同時期とみられる。皿は、器高、底部の境の指圧痕の残存、暗文構成などからI c類と同時期と考えられる。『長原遺跡発掘調査報告 II』大阪市文化財協会、1982、記載の編年試案に従うと、I a類を11世紀後半、I b類・I c類を11世紀末～12世紀初頭、II類を12世紀代に比定することができる。これらの資料については、奈良国立文化財研究所、飛鳥・藤原宮発掘調査部の諸氏に種々ご教授いただいた。

須恵器・土師器・陶器(図-18)

須恵器は、蓋(22・23)・杯(24)・高杯(25)があり、⑳・㉑が6世紀代、㉒・㉓が7世紀前半のものである。土師器は、杯(26)、甕(27)があり、共に7世紀前半のものである。陶器は、口径3.6cm、器高4.5cmを測る短頸甕である。体部外面は、上下2段にスタンプ文を配す。



图—17 第4调查区出土瓦器实例图

手法はロクロによる水引き成形で、底部に糸切り痕を残す。施軸は、茶褐色を呈し、古瀬戸の製品に類似する。胎土は、ほとんど砂粒を含まず、良質の粘土を用い、焼成は良好。

埴輪 (図-18)

円筒埴輪 (28) と朝顔形埴輪 (29) があり、共に窯窯焼成品である。㊸は、外面にタテハケを施した後断面M字状のタガを貼付ける。スカシは直径 3.8cm の円形で時計回りにあける。㊹は、直径19cm前後の朝顔形の肩部分で、外面はタテハケの後にヨコハケを施す。内面は、ナデ調整。スカシは円形である。タガは扁平で突出度が低い。年代は、5世紀後半から6世紀前半頃と考えられる。

石器 (図-18)

いわゆる圓筒型ナイフ形石器で、全長4.9cm、最大幅1.45cm、厚さ0.7cmである。サヌカイトの横長剥片を素材とし、打面を調整して背部とする。刃部は弯曲し、断面は台形状を呈す。

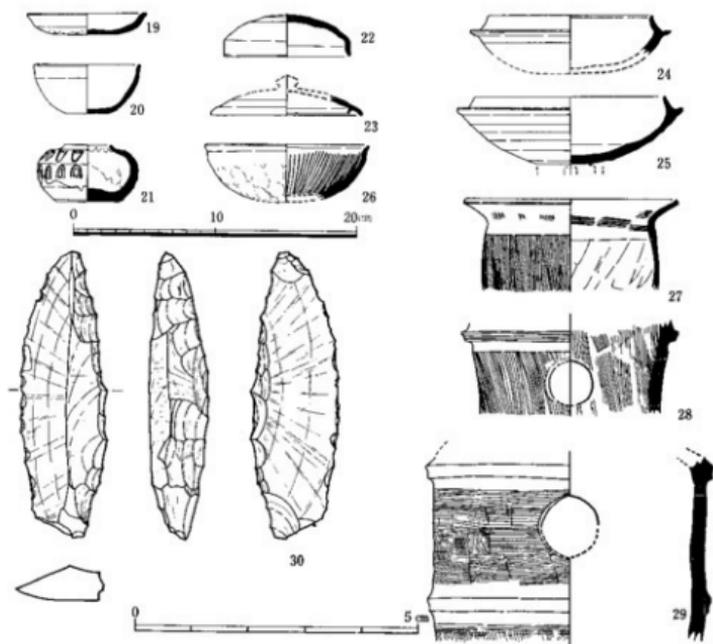
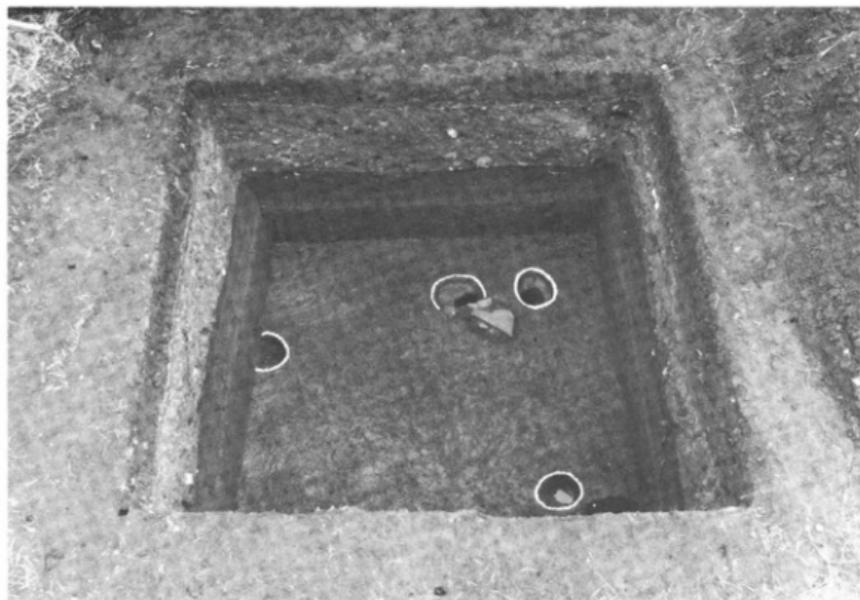


図-18 第2・3調査区出土遺物実測図



第2区全景



第3区全景



15



9



18



10



2



11



4



13



6



1

鳥取千軒遺跡

82-1 次調査

- ・調査地区所在地
柏原市大字青谷270-3-6
- ・調査担当者
安村俊史
- ・調査期間
1982年5月27日
- ・調査面積
11m²/165m²



図-19 調査地区附近地図

鳥取千軒遺跡は、鳥取千軒と俗称される地域周辺に広がる遺跡であり、奈良時代の屋瓦を出土することから鳥取廃寺跡の存在が推定されているが、現在のところ、実態は不明である。

第1トレンチ(2.0×1.7m)では、表土下28~44cmで地山が検出され、遺物は見られない。第1トレンチから南へ8mの第2トレンチでは、表土下70cmで北東隅に一部地山が認められたが、さらに南西方向へ下がっており、建物基礎より深くなるため、それ以上の掘り下げを中止した。地山直上には約30cmの厚さの包含層(灰褐色砂質土)が認められた。遺構は両トレンチとも全く認められず、遺物は土師器・須恵器・陶器等の細片ばかりであり、中世の遺物と考えられる。遺物が細片ばかりであり、包含層が厚いので、斜面上からの流れこみや、盛土による二次堆積であると考えられ、周辺での遺構はあまり期待できない。調査地北側の平坦微高地が、現在、集落となっているが、その周辺に中世頃から集落が存在したのではないだろうか。千軒という地名も、この集落を指したものでないかと考えられる。

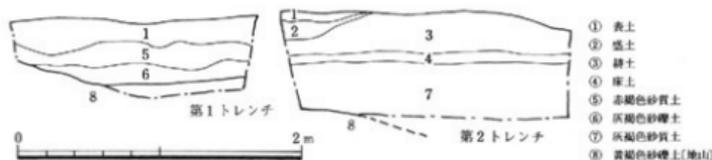


図-20 第1・2トレンチ東壁土層図

田 辺 遺 跡



图-21 调查地区附近地区

1. 81-9次調査

・調査地区所在地	柏原市田辺1-1030-2
・調査担当者	北野 重
・調査期間	昭和57年2月25日～26日
・調査面積	5㎡/98㎡

当調査区は田辺丘陵の縁辺部にあたり、南向きのなだらかな傾斜地に位置する。南西部は急激に落ち込む谷となる。

調査は2.5×2.0mのトレンチを設定して実施した。まず厚さ約20cmの表土を除去した後、比較的多くの遺物を包含する茶灰色粘質土層が見られた。この土層は約30cmの厚さに堆積していたが、攪乱を受けており、既有家屋造成時の2次堆積と考えられた。この茶灰色粘質土層を掘削後、地山を切る形で、井戸が検出された。井戸は直径1.2m、深さ約0.8mを測る。埋土は上層から、礫層、黄灰色粘質土、灰黄色粘質土、淡緑灰色粘質土の各層が認められた。礫は直径5～15cm大の川原石が多かった。

遺物には、須恵器、土師器、円面硯がある。いずれも茶灰色粘質土層内からの出土であるが土師器の高杯と、円面硯は井戸の礫層直上に位置していた(図-23)。

1は円面硯のうちの踏脚硯に属する硯の破片である。台部の基底と、脚柱部2脚のみが残存している。最大径は31.3cm、残存高は3.2cmを測る。環状の台部基底と、三角柱状の脚柱は、一つの粘土塊から削り出して作られている。その際、基底下面を除く周囲を丁寧にヘラ削りで整形し、脚柱および基底の角をすべて軽く面取りして仕上げている。脚柱下端の内面には2脚のいずれにもヘラ様の工具でかき上げたあとが認められる。同種の硯の中には、台部基底と、脚柱部を組合せて作るものもあり、その際の接合痕が形微化し、痕跡的に遺った可能性がある。色調は灰白色を呈し、極めて堅緻な焼きである。また、台部基底の上面を除く3面および脚柱内面には、淡緑色を呈する自然釉がかかっている。

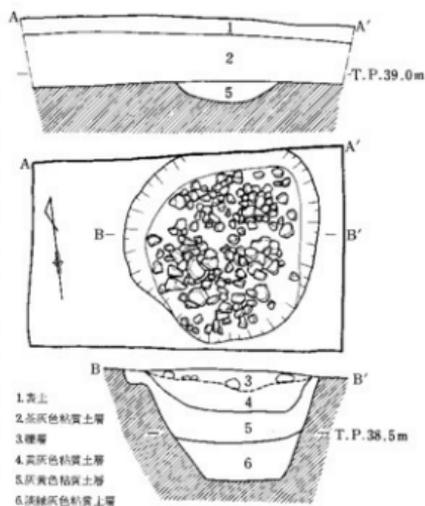


図-22 遺構図

土師器 2は高杯である。低い脚部に大きく水平近くを開く杯部がある。脚柱は10角形に面取りし、脚裾部の上面にはへら磨きを施す。脚柱内面にはしほり目が認められ、脚裾部内面はナデで仕上げる。杯部上面には斜放斜状暗文と3重のラセン暗文を配している。杯部下面にも荒いへら磨きを一部重なる様に施している。

3は蓋である。つまみを欠損する。体部はなだらかに伸び、口縁はわずかに下方に屈曲する。外面には直線的な荒いへら磨きが、一部交差するように施され、内面には2重のラセン文が認められる。

4～6は皿である。このうち、4・5は平らな底部から直線的に口縁部が伸び、口縁端部は内側に肥厚する。4には斜放射状暗文が認められる。6は口縁部の下半が内弯、上半が外弯する形態を持ち、口縁端部は内側に肥厚し、断面が丸くなって終る。内面には間隔の粗い斜放射状暗文と2重の連弧文が施されている。底部外面はへら削りをする。

須恵器 7は杯蓋である。口径12.4cmを測る。天井部は丸く、口縁端部が下方に屈曲する。かえりはなく、扁平な宝珠つまみが付く。灰白色を呈し、軟質である。

8は杯身である。口径10.8cmを測る。体部は直線的に伸び、体部の直下に低い高台が付く。灰色を呈し、堅緻な焼きである。

これらの遺物は2が7世紀末から8世紀初頭に属するほかは、概ね、8世紀の前半に含まれるものであろう。

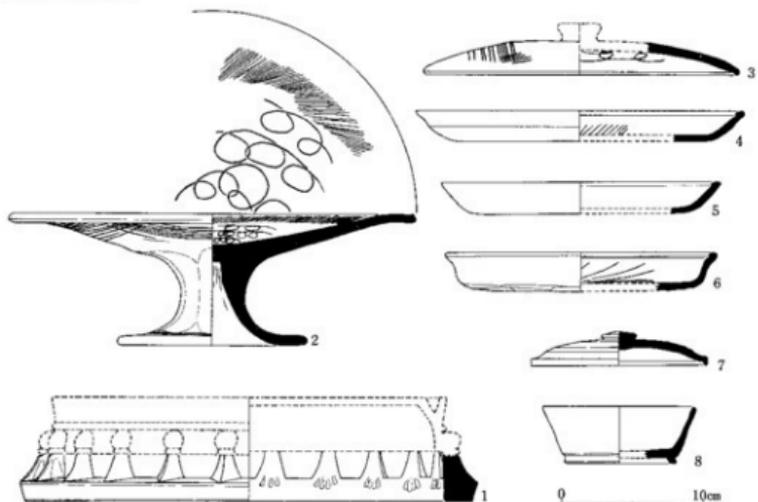
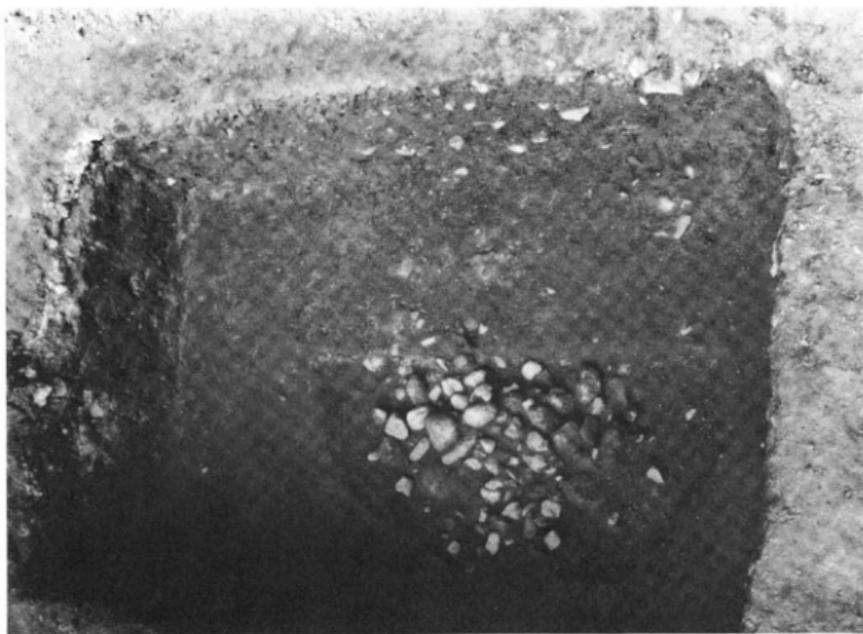
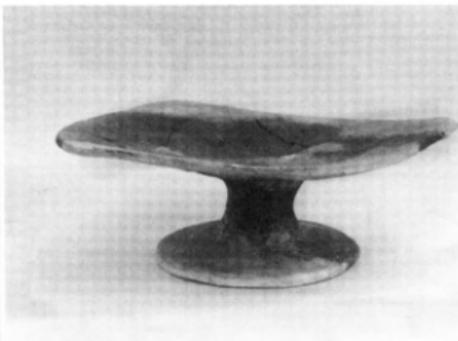


図-23 出土遺物実測図



井戸（南側から）



出土遺物

2. 82-3 次調査

- ・調査地区所在地 柏原市田辺3-1017
- ・調査担当者 安村俊史
- ・調査期間 1982年5月20日
- ・調査面積 6㎡/257㎡

調査は1.5m×4mのトレンチによって行ったが、表土直下、TP38.5m前後で地山が確認された。過去に相当の削平を受けているようである。トレンチ中央に幅50cmの溝状遺構が認められたが、近世以後の陶磁器片を含んでいる。溝内からは、瓦質羽釜・土師器等が出土しているが、いずれも細片であり、図化不能である。

調査地は田辺院寺南西の丘陵上であるが、周辺では、これまでにかなりの削平が行われているようである。

3. 82-4 次調査

- ・調査地区所在地 柏原市田辺2-2-9
- ・調査担当者 安村俊史
- ・調査期間 1982年5月20日～22日
- ・調査面積 29㎡/156㎡

調査は1.5m×7.6m、2.1m×8.5mの2本のトレンチによって行った。黄褐色砂礫土の地山が表土直下に認められ、TP40.8mである。過去にかなりの削平を受けているようであるが、土壇2、溝4が確認された。

土壇-1は、180cm×140cmの楕円形状であり、深さ35cm、土師器・須恵器・瓦器・瓦質羽釜等が出土しているが、いずれも細片である。埋土は褐色砂質土・黄褐色粘質土。

土壇-2は、直径280cmの円形状と考えられ、北半のみを掘削した。深さは84cm。土師器・須恵器片、瓦質羽釜(1・2)、巴文軒丸瓦(3)が出土している。埋土は褐色砂質土、灰褐色砂礫土、底には人頭大の石が多く見られるが、性格は不明である。

溝-1は、幅50cm、深さ20cm、土師器・須恵器・瓦器細片が出土している。

溝-2は、幅90cm以上、深さ90cm、須恵器・土師質羽釜片が出土している。埋土は褐色砂質土、下層は灰褐色粘質土、淡灰褐色粘質土、二段もしくは三段の掘り込みになっており、埋土から流水があったのは確実である。

溝-3・4は、共に幅20cm、深さ10～15cmであり、一連のものと考えられる。溝-3からは須恵器・磁器片が出土している。両溝は土壇-2より新しい時期を示す。

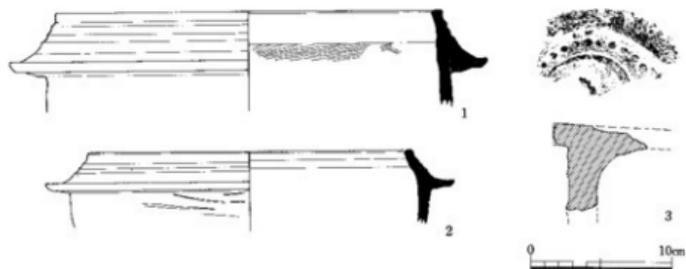


图-24 土坑-2 出土造物实测图

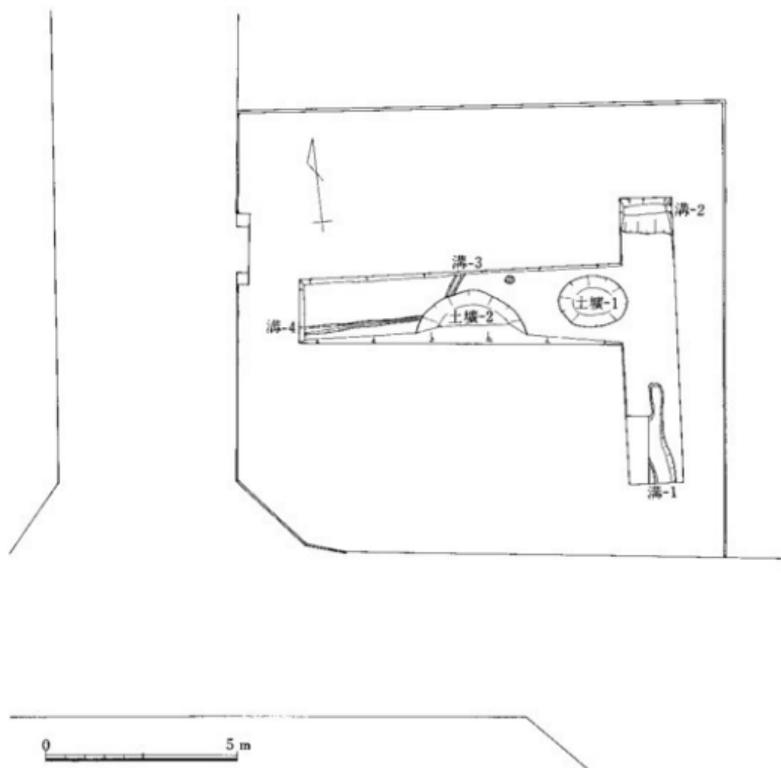
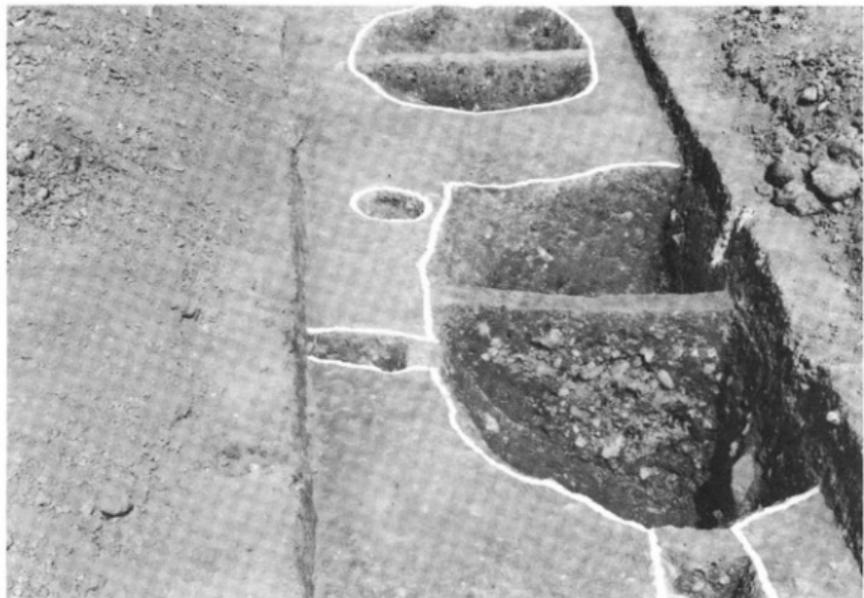
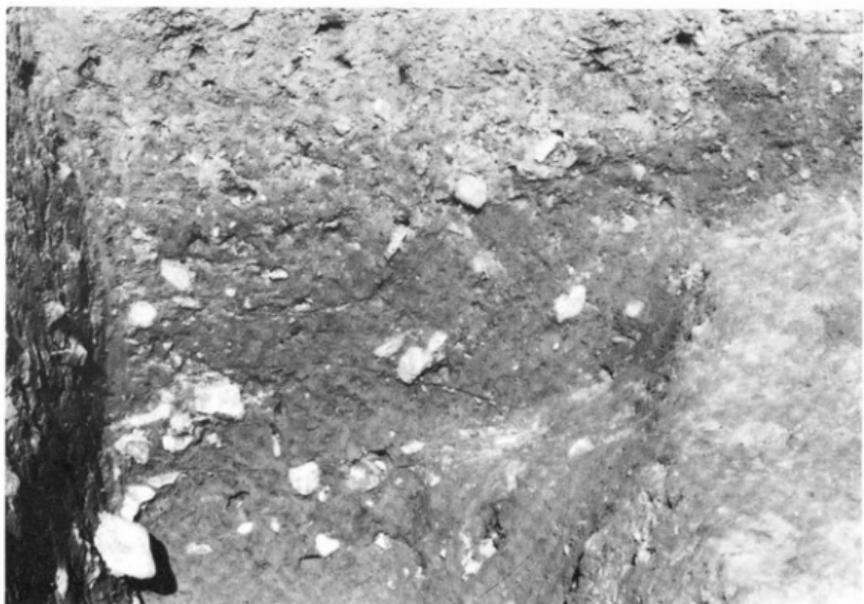


图-25 遗坑平面图



西地区遺構



4. 82-6 次調査

- ・調査地区所在地 柏原市田辺1-2046・2047
- ・調査担当者 安村俊史
- ・調査期間 1982年5月31日～6月8日
- ・調査面積 34㎡/78㎡

史跡田辺廃寺跡内に山車収納庫を建築する計画があり、史跡現状変更の申請が出され、文化庁の指示により遺構の有無を確認するために、発掘調査を実施した。調査地は田辺廃寺の東回廊に当たると予想されたため、回廊及びその関連遺構の検出に努めたが、確認できなかった。

地山面は非常に浅く、調査地東端で表土下20cm、中央で表土下60cm、西端で表土下10cmであり、TP42.0～42.3mをはかる。地山直上に盛土が積まれている点、地山にかなりの比高差が見られる点から、過去にかなりの削平を受けていると考えられる。

遺構は、東端近くで、北西から南東方向の溝-1を確認。幅約50cm、長さ160cm以上、深さ約5cm、埋土は淡赤褐色シルトで遺物は認められない。土壌-1は、直径約120cmの円形、埋

土は灰色シルトで土師器片を含む。ピット-1は直径約50cm、ピット-2は直径約35cmであり、柱穴とも考えられるが、残存状態が悪く、対応するピットも認められない。

遺物は盛土から、屋瓦・土師器・陶磁器類が出土している。屋瓦は布目瓦が見られるが、少数であり、良好な資料は少ない。中世以後の屋瓦類も出土しており、鎌倉時代の巴文軒丸瓦、連珠文軒平瓦が出土している。巴文は頭がやや尖り気味で幅約1cm、脚は細く長くのびる。外区に珠文と一重の圏線、内外区間に二重の圏線が巡る。連珠文軒平瓦は、直径9mm、高さ5mmの珠文を取り囲む圏線が巡り、

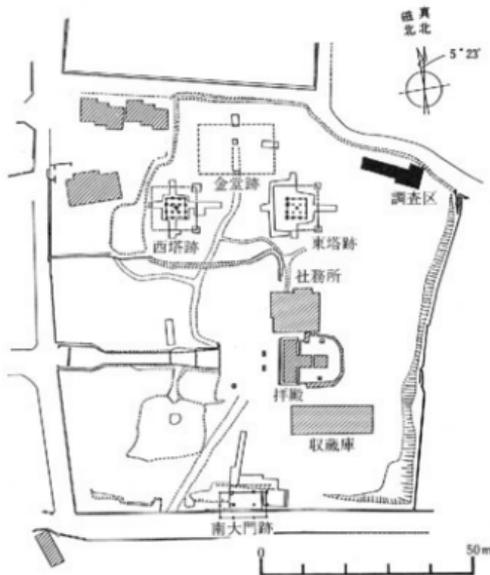


図-26 調査区位置図(註)



図-27 出土軒瓦実測図

巴文軒丸瓦に対応するものである。いずれも焼成良好、灰色を呈する。土師器、陶磁器類も良好なもの少ない。また、近世の仏具と考えられる遺物が多数出土している。

顕著な遺構、遺物は認められず、中世及びそれ以後にかなりの削平を受けているようである。そのため、回廊遺構が削平されているとも考えられるが、今回の調査地よりも東側（外側）に回廊が存在した可能性も十分に考えられる。

以上の調査結果報告を文化庁に提出し、文化庁から、1. 盛土による、遺構面の保存を図ること。2. その他、実施に当っては、大阪府教育委員会の指示を受けること。の二項の条件を付した現状変更の許可を得た。

註

大阪府教育委員会「田辺廃寺跡発掘調査概要」1972の図に新たに加筆したものである。

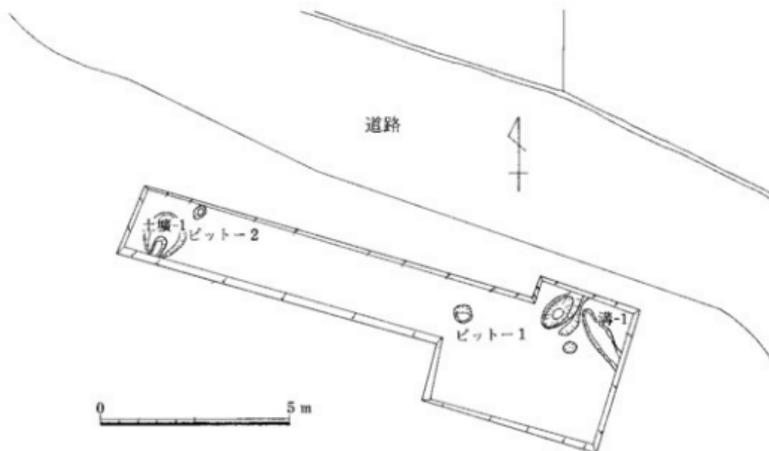


図-28 遺構平面図



東地区遺構



西地区遺構

5. 82-7 次調査

- ・調査地区所在地 柏原市田辺2-1231~41
- ・調査担当者 安村俊史
- ・調査期間 1982年6月14日~17日
- ・調査面積 30㎡/105㎡

調査地は、東から西へと張り出す舌状の低い丘陵の先端近く、南側緩傾斜面上に位置する。調査地区南半は地山の削平が著しく、地山面は北端で表土下10cm (TP39.8m) 南端で表土下40cm (TP39.3m) であった。遺構は孤立柱建物に伴うと考えられるビット11、溝6が確認された。

ビット1~5は南北に一列にならび、一連のものと考えられる。掘方は隅丸方形で、一辺が60~76cm、柱径は15~20cm、柱穴底面はTP39.1~39.2mでほぼ等しい。ビット1・2は非常に深く、深さ50cm前後を残す。孤立柱建物の柱穴と考えられるが、東西方向に対応するビットが認められないため、規模は不明、南北は四間(8.2m)以上である。

ビット6~10はいずれも隅丸方形で、一辺が40~60cmであるが、ビット8は80cmを計る。ビット6・8・10は底面で柱の太さを確認できた。直径15~20cmである。ビット1~5による孤立柱建物の東柱である可能性もあるが、直角をなさない。二時期以上の建物が重複していると考えらるべきであろう。ビット8を除いては、いずれも痕跡を留めるのみである。ビット11は円形、深さ8cmである。調査地北半のビットは非常によく残っているが、南半のビットは後世の削平によって痕跡を留めるにすぎない。

溝1~6は、いずれも南北方向を示すが、削平を受け、痕跡を残すにすぎない。溝3・6は石組み暗渠である。溝3は長さ3.5m、北端は確認できたが、南端は視乱を受けており不明。深さは16cm、自然石を二個直立させ、その上に一石を架橋しており、丁寧な構造である。石材は大部分がサヌカイトである。溝6は長さ2.2m以上、深さ12cm。南半は小礫を敷き詰め、その上にこぶし大の河原石を置く。構造は溝3よりも単純である。溝はビット群と同方向を示すが、切り合い関係からビット群よりも時期の下のものであることがわかる。しかし、時期は不明である。

遺物は遺構内・盛土から、土師器・須恵器の細片が出土している。時期を明確にできる遺物は少ないが、7世紀中葉~後葉の須恵器杯蓋・杯身小片がビット1・3・4から出土している。他の時期の遺物がほとんど認められない点、ビットの大きさ等から、この須恵器が孤立柱建物の一時期を示していると考えられる。

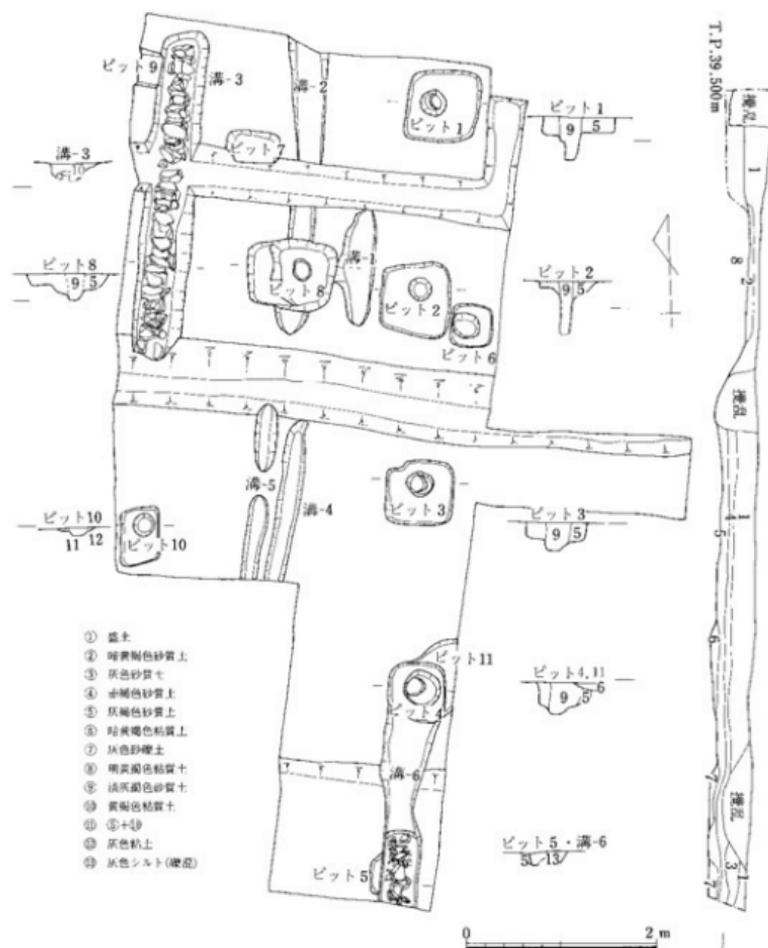
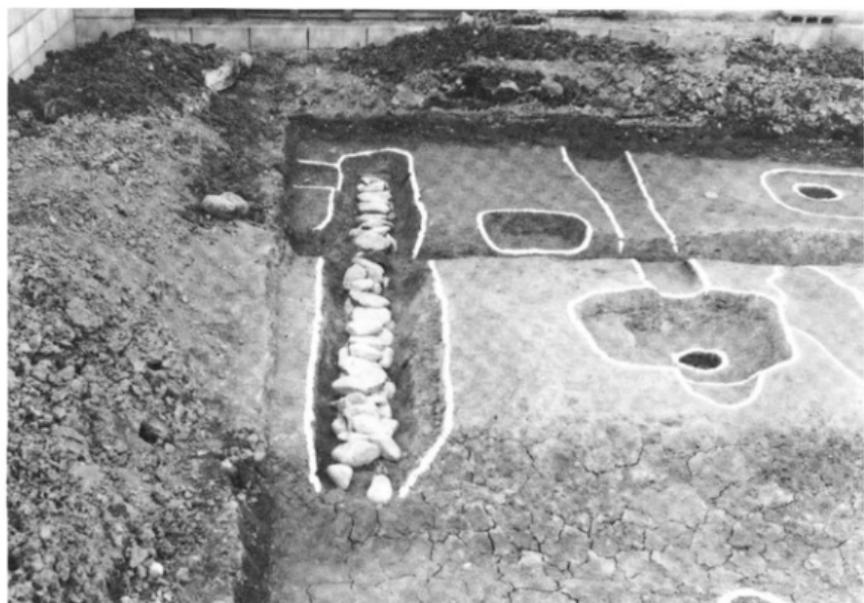


図-29 遺構図 (遺構断面基準高TP 39.500m)



東地区遺構



西地区遺構

玉手山遺跡

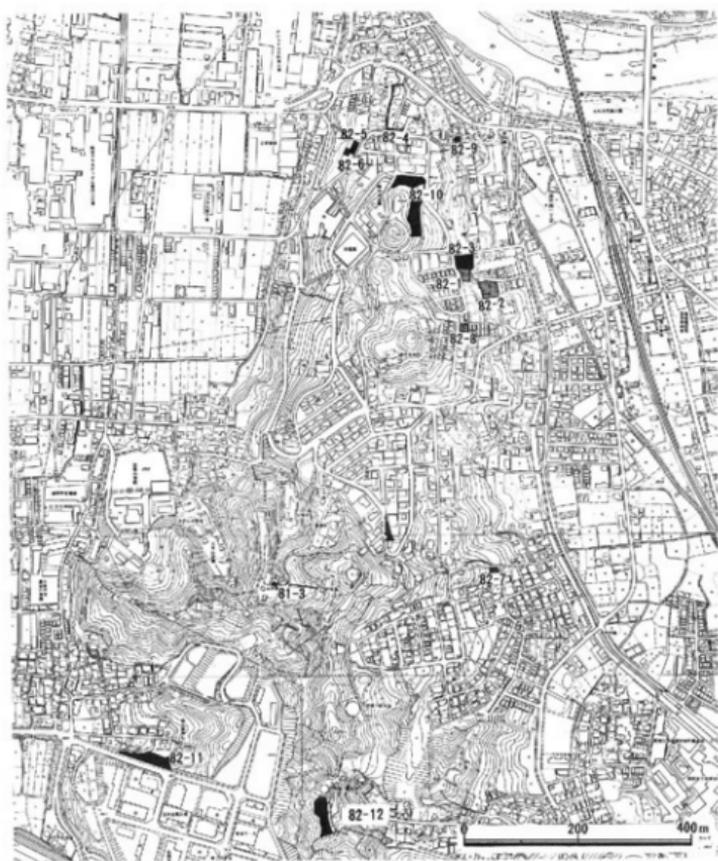


图-39 调查地区附近地图

1. 81-3次調査

- ・調査地区所在地 柏原市玉手町7-1-387
- ・調査担当者 竹下 賢、松岡良憲（大阪府教育委員会）
- ・調査期間 1982年1月6日
- ・調査面積 0.75㎡/162㎡

当該地区は、南北1.5km、東西0.25kmの広さをもつ玉手山遺跡のほぼ中央、玉手山7号墳の西150mほどの地点に位置している。玉手山遺跡自体は、弥生時代後期の集落跡として知られているものであるが、本調査区は、玉手山7号墳の築かれている尾根から派生する斜面に位置する。このため、遺構、遺物の存在する可能性が比較的低いと考えられ、バックホーによる機械掘削調査を実施した。調査は、0.5×1.5mのトレンチを1ヶ所設定し、深さ1.2mまで掘り下げた。現地表面から0.9mまでは、玉手山遊園地造成時の盛土であり、その下は造成当時に、削平を受けた地山であるため遺構の存在は認められなかった。遺物は、盛土上部から近接する安福寺三天堂の屋根瓦と思われる丸瓦片・平瓦片が数点出土したのみであった。いずれも細片であるため図化は出来なかった。（松岡）

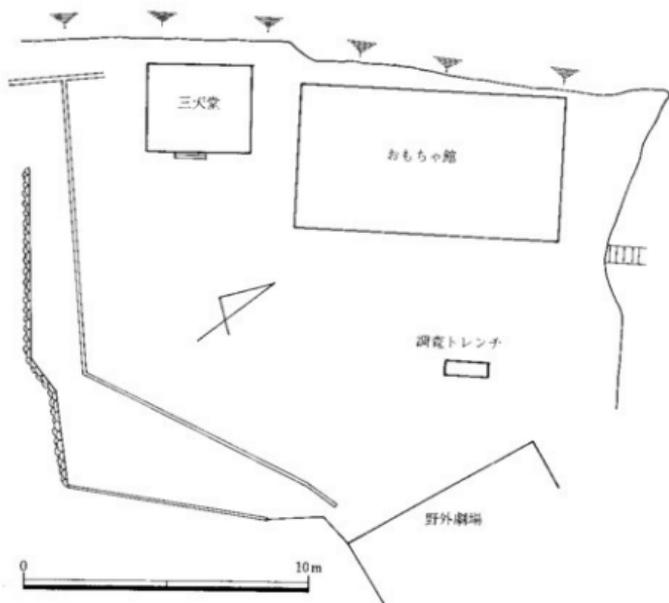


図-31 調査位置図

2. 82-3次調査

・調査地区所在地	柏原市片山8-4・5・6
・調査担当者	安村俊史
・調査期間	1982年5月11日~19日
・調査面積	194㎡/495㎡

調査地は玉手山丘陵北端近くの東斜面である。調査地西端では地表下30cm (TP32.3m) で地山が検出されるが、東端では地表下100cm (TP28.0m) で地山は未検出である。人力掘削によって土層を確認した後、機械掘削によって盛土を除去した。地山は五段の階段状をなす。これは過去にぶどう畑として利用されていたためである。遺構は溝4条を確認したが、溝-2・3は無遺物、ぶどう畑に伴うものと考えられる。

溝-1は、南北方向の溝であり、深さ20cmを留めるにすぎず、ぶどう畑に伴う石垣によって損なわれている。土師器が出上しているが、細片が多い(25)。

溝-4は、東西方向の溝であり、調査地区北東隅に当たるため、幅・長さは共に確認できなかった。また、深さは90cm以上であるが、建物基礎よりかなり深くなるため、それ以上の掘り下げは行わなかった。埋土は上層が遺物を多量に含む灰褐色砂質土、以下、遺物の少ない淡灰褐色粘質土、暗灰褐色粘質土、灰褐色砂質シルトと続く。遺物は須恵器・土師器が多数出土している(1~24)。須恵器杯蓋は内面にかえりのつくもの(1)、かえりがつかず、端部で直角に屈曲するもの(2・3)がある。つまみは中央が高く突出するもの(1)から偏平なもの(3)までみられる。杯身は高台のつかないもの(4~6)、断面正方形に近く低い高台のつくもの(7~10)がみられる。4・5は口縁が直立するが、6は口縁部が外反し、小型である。7~10は貼り付け高台を有し、口縁部はやや外反気味になる。11は短頸壺の蓋であり、口縁部は天井部から直角に近く屈曲する。つまみは中央がやや突出する。12~24は土師器。12は偏平なつまみ、平坦な天井部を有する蓋。13~18は皿類。小型のもの(13)、中型のもの(14)、中型でやや深いもの(15)、大型で口縁部がやや外反し、端部が肥厚するもの(16・17)、大型で口縁部が厚く、端部がやや内傾するもの(18)がみられる。いずれも口縁部ヨコナデ、他を不定方向のナデで仕上げる。19は盤、直径29.8cm、口縁端部は肥厚し、やや外反気味から直立する。高台は高く、器高の半分近くにおよぶ。20~22は高杯脚部。20・21は低く裾広がり脚であり、タテ方向のナデによる面取りが見られる。脚端部はヨコナデ。22は小型の高杯であり、手づくねである。23・24は鉢、共に口縁部はやや外反し、端部が肥厚する。遺物の多くは上層灰褐色砂質土から出土しているが、1・2・7・9・12・24は、下層の淡灰褐色粘質土から出土している。相対的に、下層には古い時期の遺物が含まれていると言えるが、層位関係はあまり良好ではない。これは、斜面地の溝であるので、流れ込みが激しかったためと考える。

遺構以外からの出土遺物は少ないが、26は灰色土から出土した土師器碗である。

玉手山丘陵はぶどう畑として開墾された際に、かなり地形が改変されており、良好な遺構はあまり発見されていない。今回の調査でも、溝-4の発見が唯一の成果と言える。出土遺物は7世紀中葉から8世紀中葉頃の時期を示し、玉手山丘陵から普遍的に出土する時期の遺物である。溝-4の深さは1m以上に及ぶと考えられ、洪積段丘である玉手山丘陵では、7世紀中葉頃に大規模な開発が行われたことを示すものと考えられる。また、杯、皿類が多く、壺、甕類が少ないことが特徴としてあげられる。

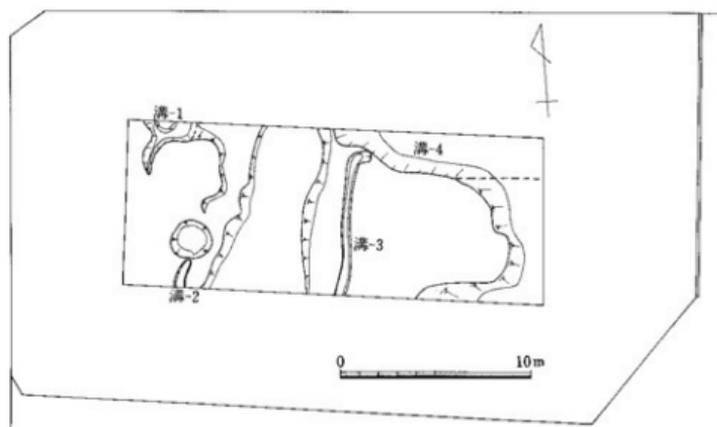


図-32 遺構平面図

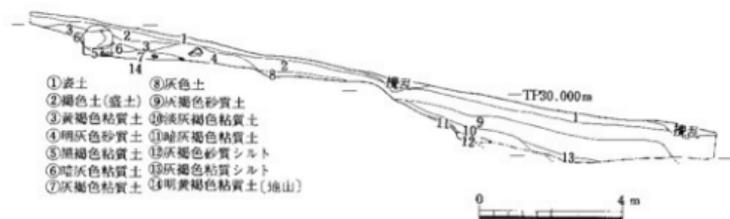


図-33 北壁土層図

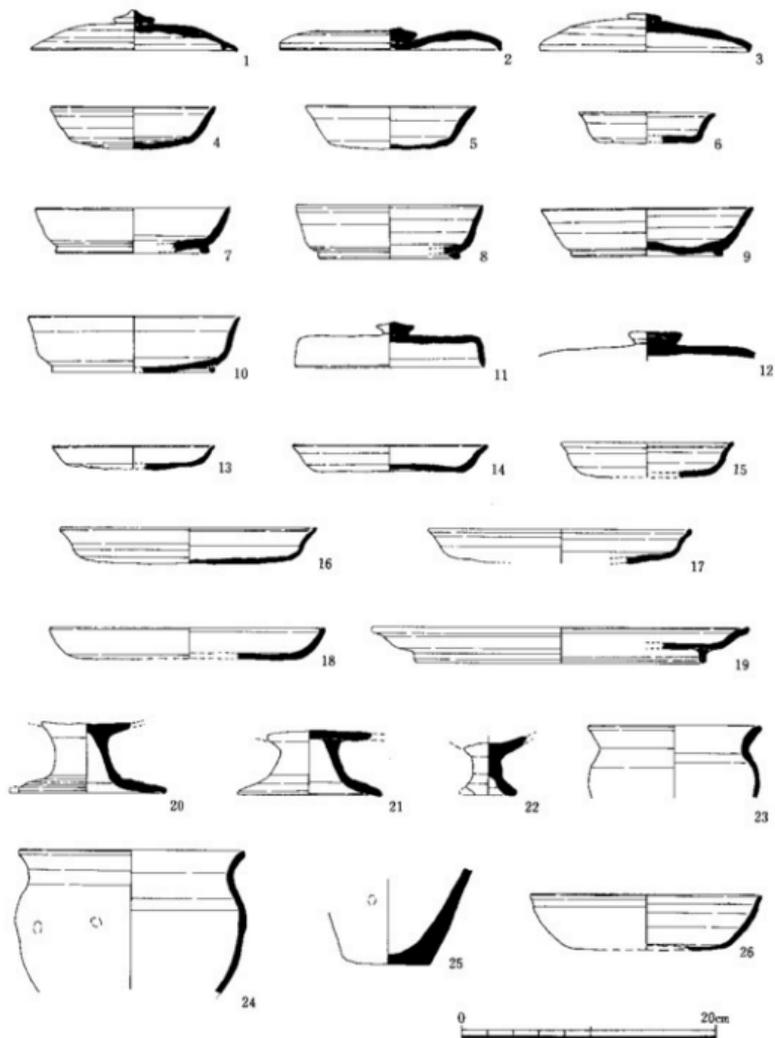
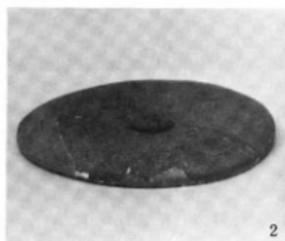
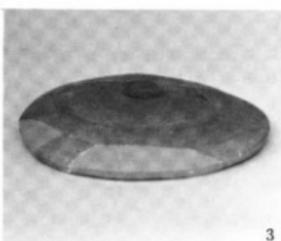


图-34 清-1 (25)・清-4 (1~24)・包含層(26)出土土器実測図



2



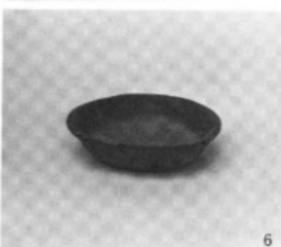
3



4



5



6



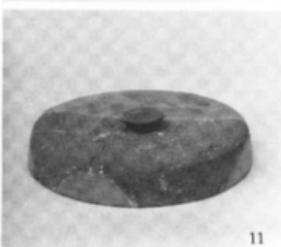
7



9



10



11



13



18



19



20



21



25

3. 82-5 次調査

- ・調査地区所在地 柏原市玉手町149-7
- ・調査担当者 安村俊史
- ・調査期間 1982年6月16日~21日
- ・調査面積 35㎡/143㎡

調査地は玉手山丘陵北端近くの西斜面であり、北東50mには片山庵寺塔跡が、南東170mには玉手山1号墳が存在する。調査の結果、溝が一条発見され、溝内には大量の埴輪片が埋没していた。

層序は、表土、盛土が約30cmあり、その直下に淡灰褐色砂質土・灰褐色砂質土が堆積する。淡灰白色砂礫土の地山は、北から南へ、東から西へと傾斜する。

溝は北側で地山を掘り込んでおり、南側では地山上の二層を南壁とする。幅1.5m、長さ5m以上で、調査地西側へさらに伸びており、東側は擾乱によって切られている。深さは30~50cmを留める。溝内埋土は上層から淡灰褐色粘質土、黒褐色粘質土、淡黒褐色粘質土、淡褐色シルトであり、出土遺物は弥生式土器片1点を除くと、すべて埴輪片である。大部分の埴輪は上層から出土している。

遺物は、埴輪・弥生式土器・須恵器・瓦器等が見られるが、図化できたのは溝から出土した埴輪17点、弥生式土器1点である。埴輪には円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪がみられる。朝顔形埴輪も含めて、円筒埴輪は三類に分類できる。

I類 (1~6)。直径40~50cmと大型であり、外面調整はタテハケ→凸帯貼り付け→ヨコハケ→凸帯ヨコナデ、凸帯は1.5cm前後と高い。ハケ目は6~7本/cmと10本/cmに大別でき、両者を併用するものもある。(1)は口縁部破片であり、推定直径55cm。口縁部外面には凸帯状に粘土帯を貼り付け、ヨコナデを施す。外面・口縁部内面に赤色顔料を塗る。円筒棺の可能性も考えられる。(2)の外面調整は、口縁部が断続ヨコハケ、胴部最上段と上から三段めに回転ヨコハケ、二段めに断続ヨコハケをいずれもタテハケの後に施す。内面調整はタテハケの後、凸帯裏面を中心に、部分的にヨコナデ、口縁部はヨコハケを施す。透孔は円形で右まわりの穿孔、胴部最上段にへら記号を施す。(3)は外面左上がりのハケの後、口縁部・胴部上から二段めと三段めには回転ヨコハケを施すが、胴部最上段はヨコハケを省略する。内面はナデ、口縁部はヨコハケ調整である。(4)は外面タテハケの後、粗い回転ヨコハケ、さらに部分的に

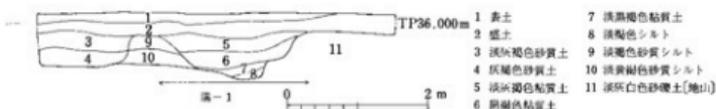


図-35 西壁土層図

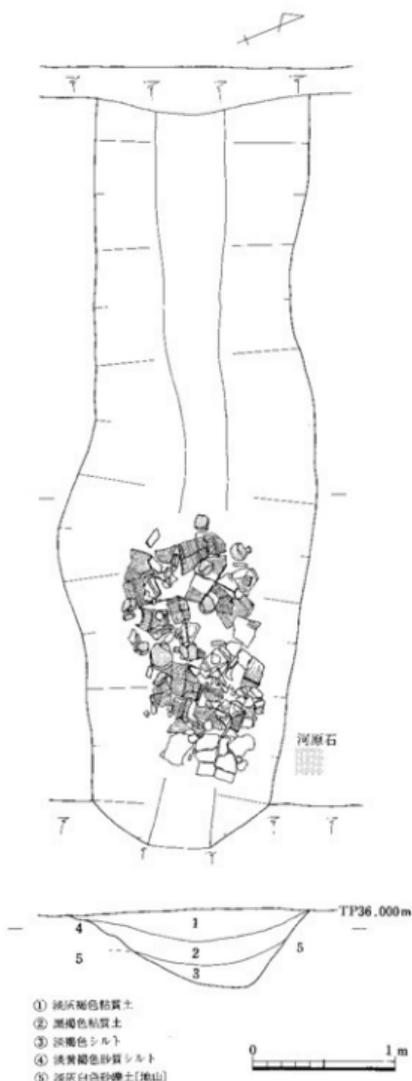


図-36 遺構図

細かい回転ヨコハケを施す。内面は左上がりのハケ、ナデ調整。円形透孔の周囲にはへら状工具によって円形の記号が描かれている。(5)は外面左上がりのハケから回転ヨコハケを施すが、基底部はヨコハケを省略する。(6)は朝顔形地輪の口縁近くであり、外面に左上がりのハケを施す。色調・焼成は、淡黄橙色で堅緻なもの(1~3・6)と淡黄灰色でやや軟質のもの(4・5)がある。

Ⅱ類(7・8)。直径35cm前後、外面調整はタテハケのみであり、ハケ目が3~5本/cmと非常に粗く、凸帯が厚く高いのが特徴である。(7)はへら記号がみられる。

Ⅲ類(9~16)。直径20cm前後、淡黄橙色・淡黄灰色を呈し、比較的堅緻である。外面調整はタテハケのみであり、ハケ目は5本/cmと7本/cmで大別できる。内面調整は、口縁近くではハケ目をナデ清しており、胴部はやや粗雑なナデ調整である。底部は指頭押圧が多くみられる。透孔はすべて円形であるが、胴部を二段以上残すものについて観察すると、胴部第二段の対向する位置にのみ穿孔するもの(9・10)。第一・二段の対向する位置に互い違いに穿孔するもの(11・12)、第一・二段の直角をなす位置に各1個穿孔するもの(13)がある。また、凸帯の間隔は9~10cmのもの(9~13)、12~13cmのもの(14~16)が見られる。

その他の遺物として、形象埴輪片・弥生式土器片がある。(17)は家形埴輪と考えられる小片である。(18)は弥生式土器の壺底部である。溝上層から出土しており、混入品である。

今回の調査についてまとめておくと、I～III類の円筒埴輪はすべて溝から密集した状態で出土しており、ある時期に放棄されたものと考えられる。しかし、放棄された時期は不明である。従来の円筒埴輪編年案を参考にするならば、I類は5世紀中葉、II・III類は5世紀末葉と考えられる。I～III類は長石を含む密な胎土である点で共通しており、焼成も大差はない。しかし、III類は製作技法が明らかに粗雑である。今回の調査結果だけでは、I～III類が同時期の可能性も考えられるが、2～3時期の埴輪が混入しているとも考えられる。これらの埴輪が出土した溝からは、河原石も多数出土している。この河原石は墳丘の墓石、あるいは周濠の貼り石として使用されていた可能性がある。すなわち、この溝が古墳の周濠である可能性が考えられる。後世に、かなりの削平を受けているが、溝南壁の淡褐色砂質シルト・淡黄褐色砂質シルトが墳丘の封土と考えられる。82-6次調査によって、この溝の南側でこれに平行する溝が発見されており、埋土も酷似している。この二本の溝が一体となり、古墳の周濠となるならば、前方後円墳、あるいは方墳の存在が想定できるのである。

註

- (1) 川西宏幸氏の名称と対応させると、断続ヨコハケ=A種ヨコハケ、継続ヨコハケ=B種ヨコハケ、回転ヨコハケ=C種ヨコハケとなる。

川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻2号(1978)

- (2) 春成秀爾「埴輪」『地方史マニュアル6・考古資料の見方(遺物編)』(1977)

川西前掲論文

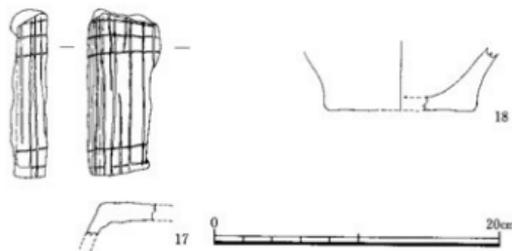


図-37 溝出土埴輪・弥生式土器実測図

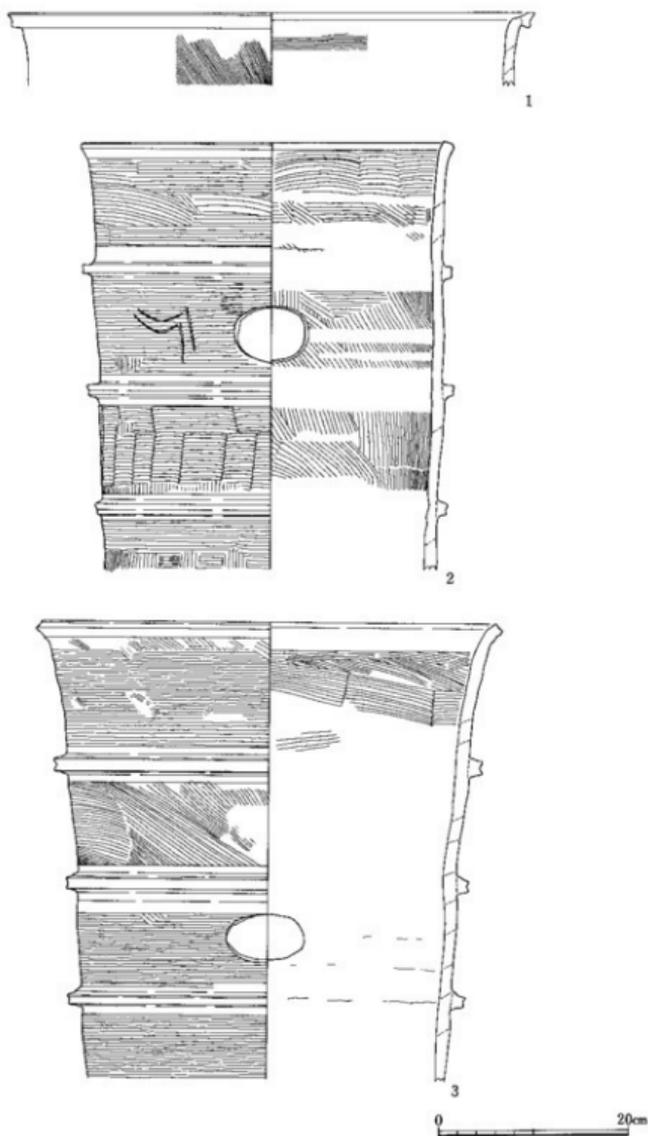


图-38 溝出土埴輪実測図

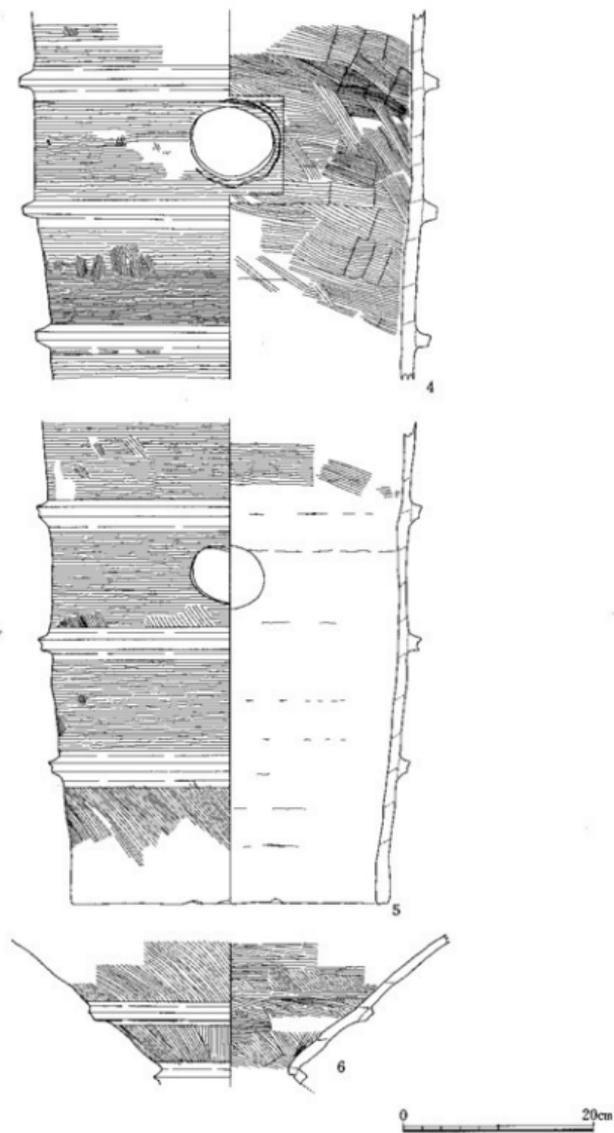


図-39 清出土地輪実測図

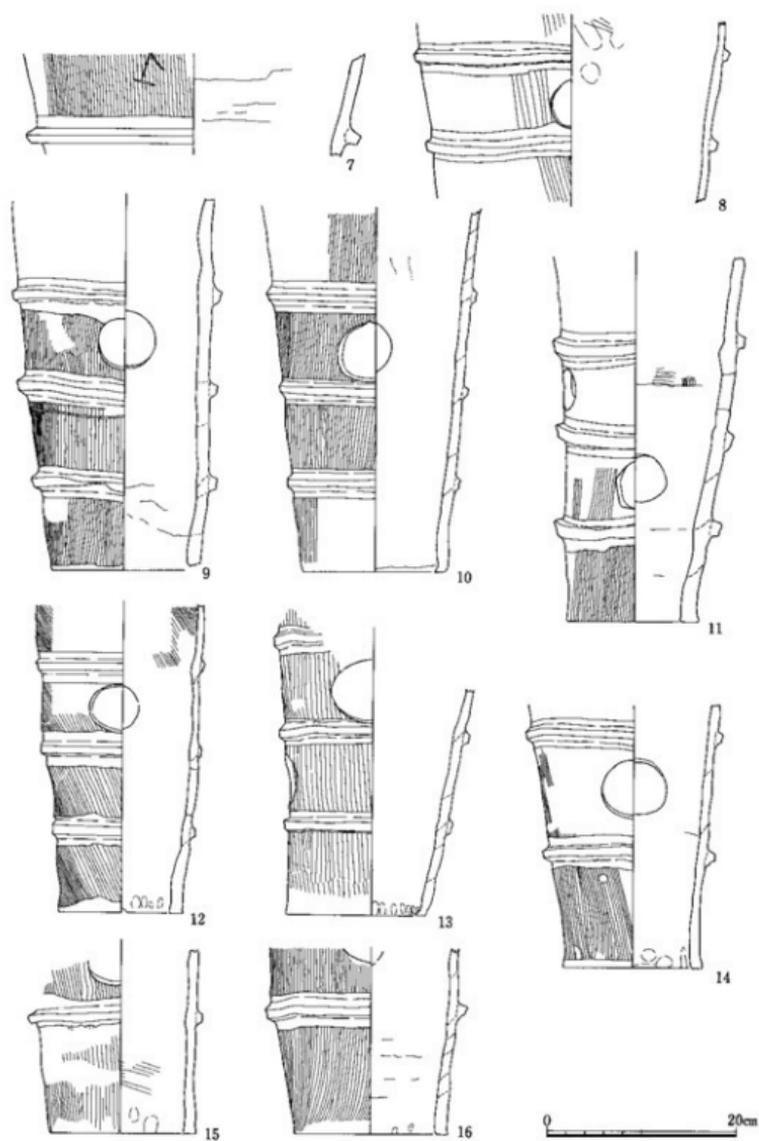
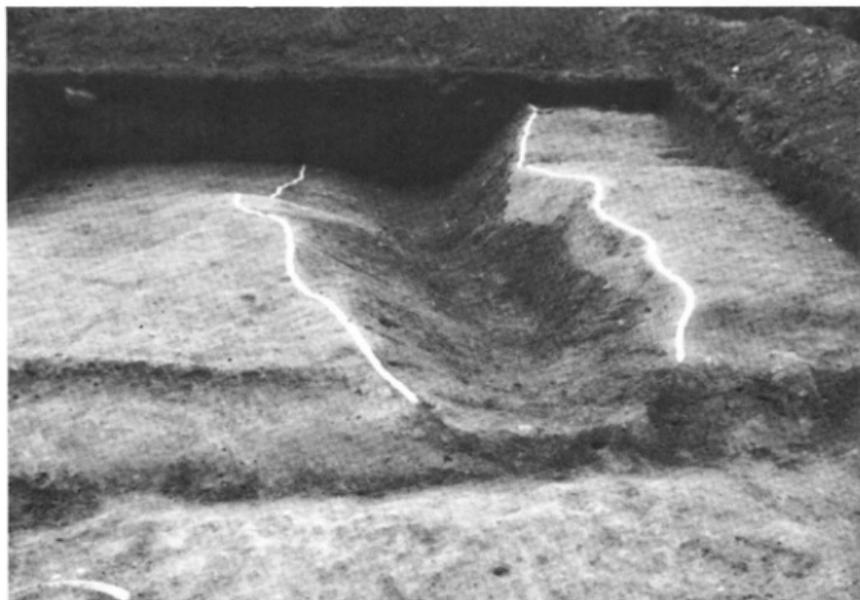


圖-40 溝出土埴輪尖測圖



溝・埴輪出土状況



溝・掘削終了後



2



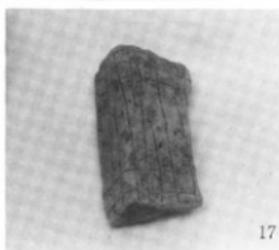
3

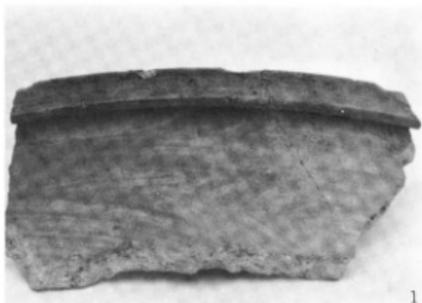


4



5

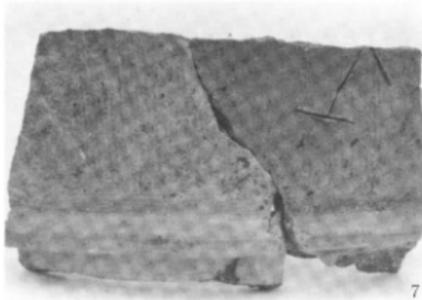




1



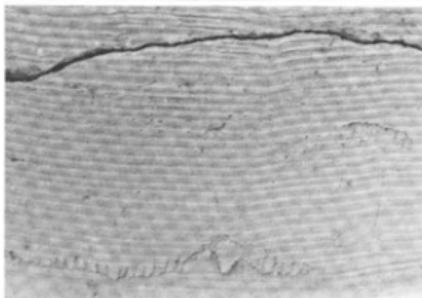
6



7



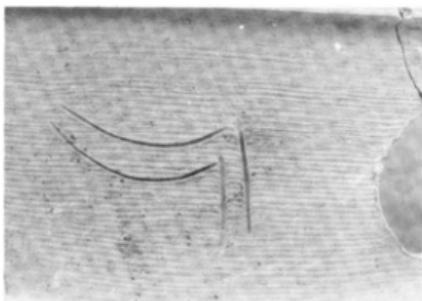
8



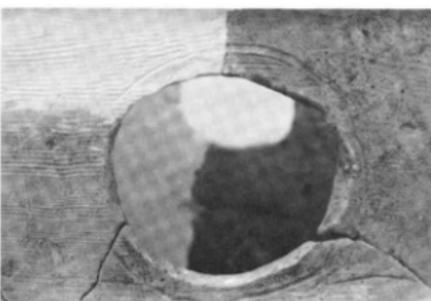
縦絞ヨコハケ (埴輪 2)



回転ヨコハケ (埴輪 2)



ヘラ記号 (埴輪 2)



ヘラ記号 (埴輪 4)

4. 82-6 次調査

- ・調査地区所在地 柏原市玉手町149-2・4~6
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 1982年6月22日~7月2日
- ・調査面積 46.5㎡/253㎡

当調査区は、玉手山丘陵北西端部の西斜面中腹に位置する。82-5調査区は北側に隣接し、前年度調査の81-1調査区は南隣である。また、北側約50mには片山庵寺の塔跡が確認されている。

調査は当初、7.5×3.0mのトレンチを設定して着手したが、後日、6.0×4.0mの調査区の拡張を行なった。

基本的な層序としては、厚さ10~30cmの表土の下に、黄灰色砂質土の薄い堆積があり、さらに、茶褐色粘質土（厚さ10~50cm）、黄茶褐色砂礫土の地山となる。黄灰色砂質土と茶褐色粘質土は遺物包含層であり、土器類の他、サヌカイトの原石、剥片、ナイフ形石器なども含まれていた。包含層は西側ほど厚くなる。

遺構は上下2面の遺構面を確認した。上層の遺構は、茶褐色粘質土の掘削後検出されたもので、7個のピット群である。ピットはいずれも円形で、直径は20~40cmを測る。埋土は茶灰色砂質土であり、ピット内から遺物は出土しなかった。切り合い関係のあるピットもあり、大きさや、配置にも統一性が見られないことから、特定の建物を想定することは難しい。

また、これらのピット群中の北東部に、一辺30cmの方形で、上面が平坦になった石を検出した。隣接地の81-1調査区では、同様の石を根石に持つピットが確認されており、今回の場合は、同種のピットの上部が削平され、根石だけが残ったものと思われる。

トレンチの西側では、地山が急に傾斜して落ち込み、その傾斜変換点が、トレンチ中央をほぼ南北に走っている。この落ち込みの縁辺部から礫群を検出した。礫群は、10~30cm大の川原石から成る。この礫群中には、土師器や須恵器の他多くの埴輪が混入していた。土器類の時期は片山庵寺の存亡時期にはほぼ見合うものである。これらの礫は82-5調査区にも認められ、古墳の葺石がこの時期に整地のため廃棄されたと考えられよう。

下層遺構は、調査区の南寄りを東西に走る溝である。幅約1.8m、深さ0.5mを測る。埋土は上層から蔦茶褐色粘質土、黒茶褐色粘質土の2層に分けられる。この溝の下層から、須恵器の杯身と高杯の蓋、土師器の壺が出土した。いずれも完形である。出土位置は西から、杯身、蓋、壺と約50cm程の間隔を置いて検出され、正営位に近かった。この溝は、82-5調査区で確認された溝と同程度の規模であり、ほぼ平行する。古墳の副溝となる可能性が高い。



図-41 発掘調査区位置図

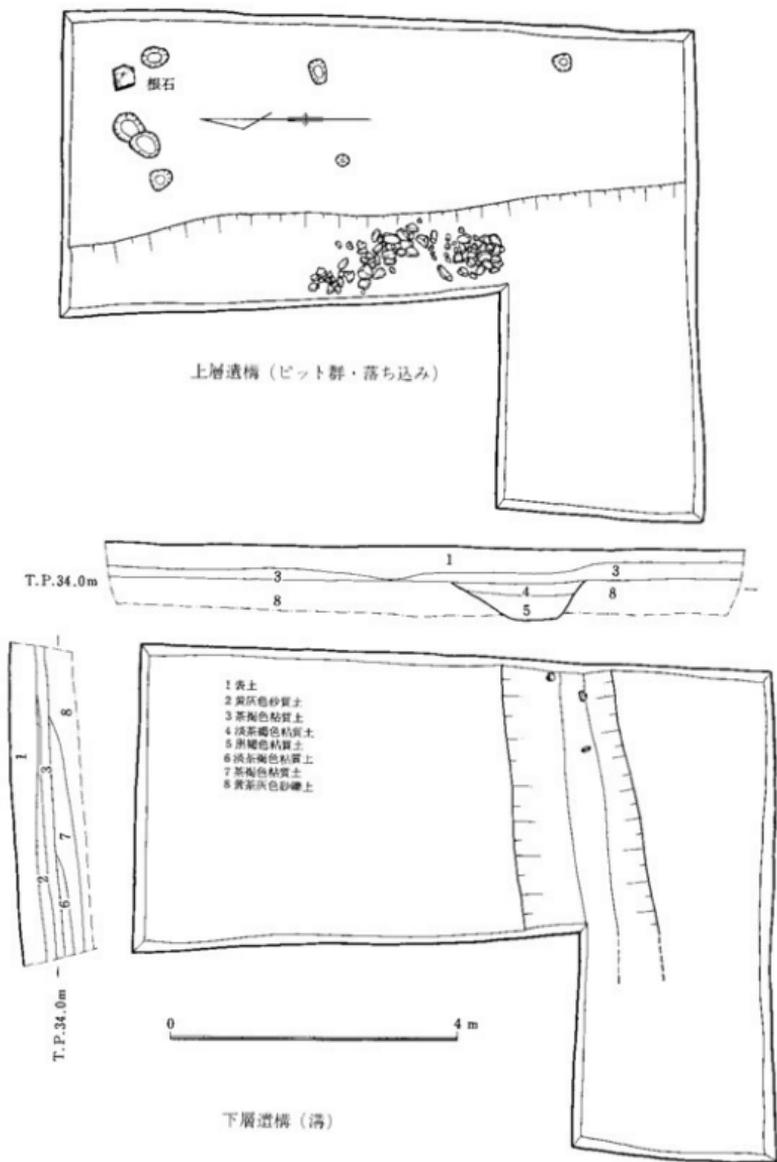


図-42 上、下層遺構図

溝内出土遺物 (図-43)

1は土師器の小型丸底甕である。球形の体部に斜めにひらく口縁部が付く。体部内面は丁寧にへら削りされ、外面はタテ方向を中心としたハケ目調整のあとナデを施している。口縁部内面は横方向のハケ目調整の後、横ナデを行ない、外面はタテ方向のハケ調整で仕上げている。

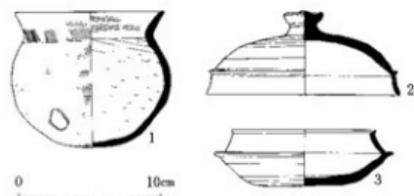


図-43 溝内出土土器実測図

また、体部下半には焼成後の穿孔がある。なお体部内面には赤色顔料の付着した痕跡が認められる。

2は須恵器の高杯の蓋である。天井部は丸くたけ高となり、基部が細く中央凸部を呈するつまみが付く。口縁部との境の稜は外方へ突出する。口縁は外反する。天井部外面の彎程度は回転へら削りで仕上げる。内面は口縁から $\frac{1}{2}$ を回転ナデ調整を行ない、残りは不整方向のナデである。色調は灰色を呈し、堅緻な焼きである。

3は杯身である。全体に偏平な形状を呈する。たちあがりは内傾し、端部は屈曲して外反する。受部は水平に伸び、端部は丸味を帯びる。底部は平らにつくり、 $\frac{1}{2}$ 程度を回転へら削りする。内面は回転ナデ調整を施す。色調は底部のみ灰白色を呈し、全体には灰色である。焼成は堅緻に仕上がっている。

これらの溝内出土の土器はいずれも5世紀後半に属するものと考えられよう。

包含層出土遺物 (図-45・46)

茶褐色粘質土の遺物包含層より、多くの遺物が検出された、少量の瓦器などの他、土師器、須恵器、石器がある。またサヌカイトの割片、原石も多量に出土している。しかし、いずれも破片が多く図化したものは多くない。

土師器 (図-45)

1～3は杯である。3は深めの器高を持ち、口縁はわずかに外反気味である。暗文などは磨滅のため不明である。1・2は平らな底部から伸びた口縁部が上半で外反する。内面には2段の斜放射状暗文と、ラセン暗文が認められる。外面は荒いへら磨きを施す。4は高台付の皿である。表面は磨滅している。2・4は8世紀前半に位置づけられよう。

5～11は甕である。このうち5は小型の甕で、口縁部は外反する。内外面とも調整は不明である。6～8は口縁部が「く」の字に屈曲し、端部はわずかに上方に屈曲するものである。いずれも体部外面には縦方向のハケ目を施し、口縁部の内外面は横ナデである。9は口縁部が「く」の字に屈曲し、体部があまりひらかない、ずん胴型の甕である。口縁端部はわずかに上方につ

まみ上げ気味である。体部外面上半は縦方向のハケ目、下半は不整方向のハケ目を施している。体部内面は磨滅しているが、ヘラ削りを行なっていると見られる。10は体部が直立気味で、口縁部はゆるやかに外反する。端部は丸くおさめている。外面は縦方向のハケ目、内面にヘラ削りを施す。

11は把手付の鍋である。器高は低く、丸底であろう。屈曲して大きくひらいた口縁部は、端部で内弯する。口縁部外面および、体部上半は横ナデ調整を行なう。体部下半は縦方向を中心としたハケ目で仕上げる。体部内面は上半が細かなハケ、下半が荒いハケを施し、さらにナデ調整を加えている。

12・13は鉢である。口縁部は内弯し、端部は丸くおわる。内面はヘラ削りの後、丁寧なナデ調整で仕上げる。13の外面には荒いヘラ磨きが認められる。

須恵器 (図-46・1~4)

1~3は平瓶である。1は肩の張らない、全体に丸味を持った体部を有するもので、口頸部は短く、口縁端部は内側に傾斜する面を持つ。体部にはカキ目を施す。灰色を呈し、堅緻な焼成である。2は底部が平らで、肩がやや張った偏平な体部を有するもので、口頸部は直線的に伸び、口縁端部は内側に傾斜する面を持っている。体部の下坂ほどにはヘラ削りを施す。灰色を呈し、全体に自然釉がかかっている。焼成は堅緻である。3は底部が平らで、肩はいくぶん丸味を帯びている。また、肩には一条の沈線がめぐる。灰白色を呈し、やや軟質である。これらの平瓶は1が7世紀前半、2・3が7世紀後半から8世紀初頭に含まれるものであろう。

4は杯身である。高台は比較的高く、外方へふんばり気味である。体部と底部の境は丸味を持っている。7世紀末から8世紀初頭に位置づけられよう。

その他の土器 (図-46・5~12)

5~7は瓦質の羽釜である。内弯する口縁部に、水平あるいはわずかに上方に反るツバがつく。口縁部外面にはいずれも3条の凹線がめぐる。ツバの下面および体部外面には横方向のヘラ削りを施す。6・7では内面調整として、口縁部と体部との境に荒いハケ目を施し、その上下には、ナデと細かなハケ目を重ねて仕上げている。6・7は灰色を呈し、堅緻な焼成であるが、5は黄灰色を呈し、軟質な焼きである。

8・9・11・12は瓦器である。8・9は碗の退化したもので高台はない。ヘラ磨きも内面にわずかに見られるのみである。11・12は甕である。11は身込みに格子状暗文を施す。12は内外面ともヘラ磨きは全くない。10は土師器の皿である。内面と口縁部外面を横ナデする。

時期は概ね、11が12世紀、8・9・12が13世紀、5~7は15・6世紀ごろに位置づけられよう。

埴輪 (図-46・13~17)

円筒埴輪は82-5調査区出土のI・II・III類すべてが認められるが、いずれも小破片で、図化したのは1点のみ(13)である。先の分類のIII類に含まれる。基底部の径は14.3cm、第1凸帯

までの高さは12.5cmを測る。凸帯は低く、断面が不整形形状を呈する。円形の透し孔は、相対する位置に穿たれ、外方から時計まわりに切り取っている。外面調整はタテハケのみで、7本/cmのハケ目を最下端から施す。内面は上下方向のナデ調整を基調とし、凸帯の裏面に一部横方向のナデを重ねる。また、内面下端には、指頭による圧痕が認められる。黄白色を呈し、堅緻な焼きである。5世紀末葉に含まれよう。

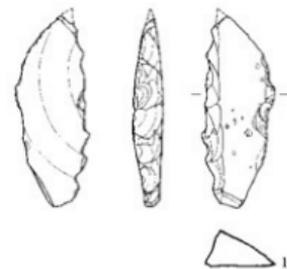
14～16は同一個体の冢形埴輪の一部である。厚手で大型なものとなる。このうち14は椽木の破片で、上面に堅尾木をのせた痕跡が認められる。15・16は柱と梁か、窓の一部であろう。外面を細かなハケ目で調整した後、粘土帯を十字に貼り付ける。その際、あらかじめヘラで切り込みを入れ、密着をはかっている。内面はナデで仕上げる。また、外面全体に赤色顔料の塗布が認められ、非常に入念なつくりとなっている。顔料塗布前の色調は黄白色から明褐色を呈し、極めて堅緻な焼きである。5世紀後半に含まれる可能性が強い。

17は形象埴輪の小破片である。わずかに凸面をなす外面にヘラによる線刻を行なっている。

石器 (図-44)

1は国府型のナイフ形石器である。比較的^{註2}広い翼状剥片を用いており、その打面部を腹面側から加工し、ほとんどを除去している。その結果、背面のネガティブな刺痕面は全くなくなり、底面のみを残している。断面は三角形形状を呈する。上端はわずかに折損しているが、尖らせていたものと見られる。刃部下半の刃ほどは鋭い刃がなく、下端も尖らない。また、刃部の一部に使用痕と思われる小さな刃こぼれが認められる。現長6.8cmを測る。

2は縦長剥片である。上方から数度の打撃を行なった痕が認められる。断面は台形状を呈する。腹部と背部と縁辺部には微細な刃こぼれをとどめる。使用痕の可能性が有る。長さ4.9cmを測る。



註1 『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1981年度』
柏原市教育委員会

註2 用語は『ふたがみ』に準じた。
『ふたがみ』同志社大学田石器文化談話会
1974年

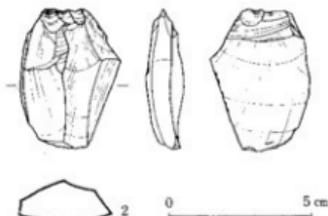


図-44 包含層出土の石器実測図

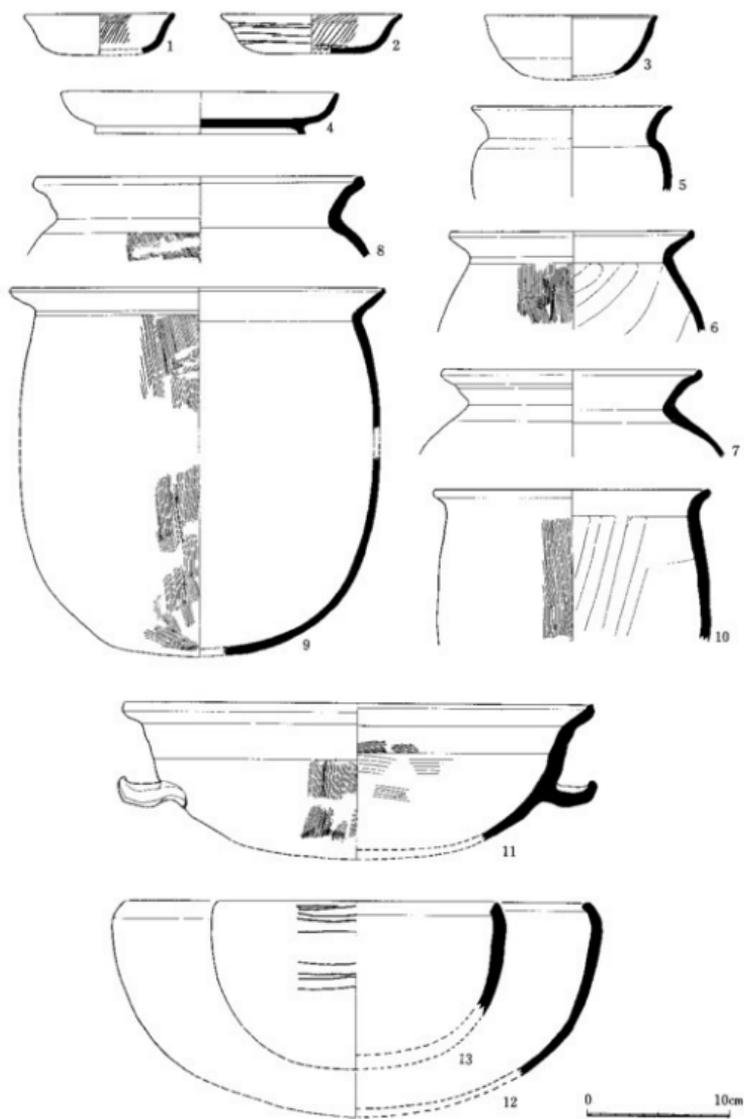


図-45 包含層出土の土器実測図

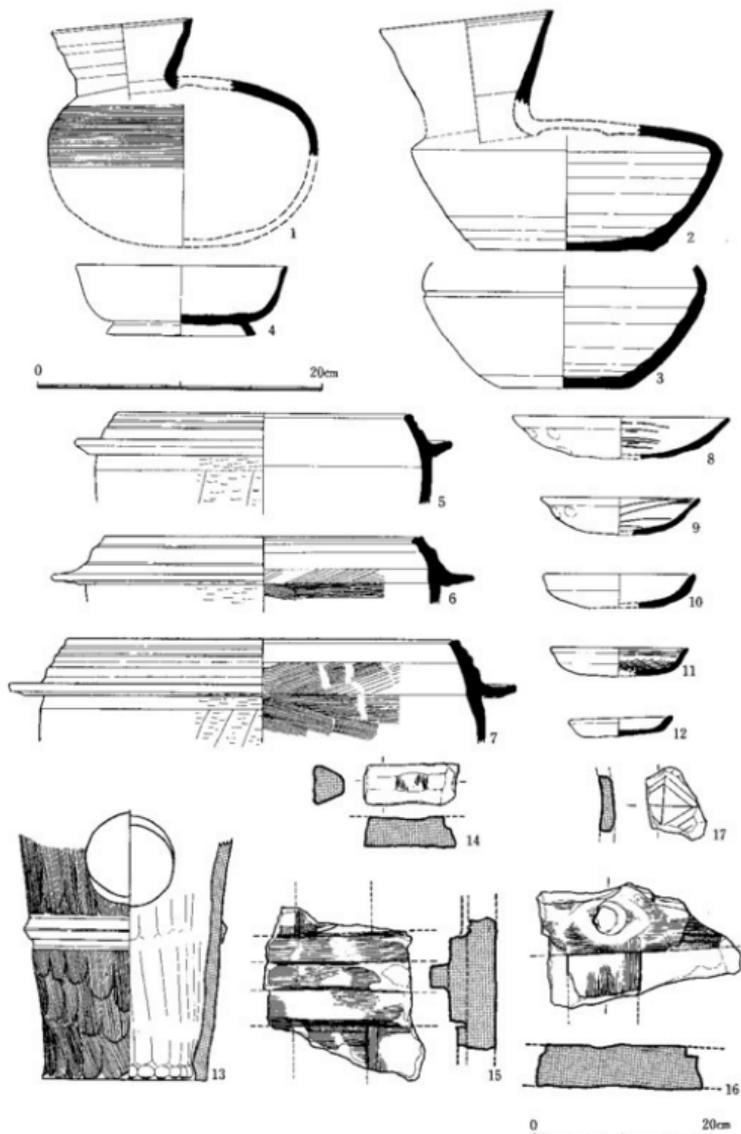


図-46 包含層出土の土器、埴輪実測図



全景（北側から）



遺物出土状況（西側から）



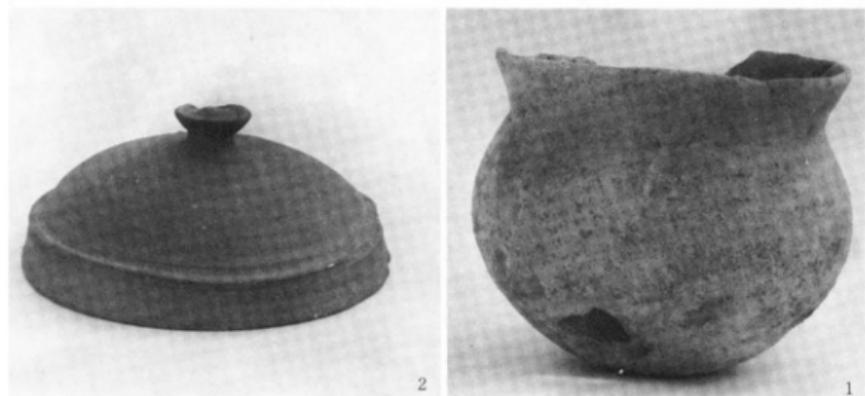
落ち込み（北側から）



同遺物出土状況（北東側から）



包含層出土遺物



溝内出土遺物

5. 82-10次調査

- ・調査区所在地 柏原市片山町14-18
- ・調査担当者 花田勝広
- ・調査期間 1982年8月30日～9月16日
- ・調査面積 600㎡/1267㎡

調査経過

カネイチビル株式会社は、柏原市片山町4-18で宅地造成を行い分譲住宅建設を計画した。この計画地は、玉手山遺跡内の玉手山1号墳に接しており、周知の遺跡であるために、カネイチビル株式会社は、文化財保護法57条の2に基づき、「土木工事等による埋蔵文化財包蔵地の発掘届出書」を昭和57年8月25日付で提出し、これを受けて、柏原市教育委員会は、カネイチビル株式会社と協議にはいり、事前に発掘調査を実施することとなったものである。

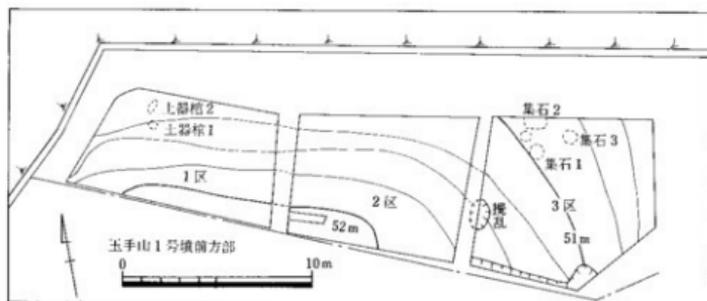


図-47 A区遺構平面図

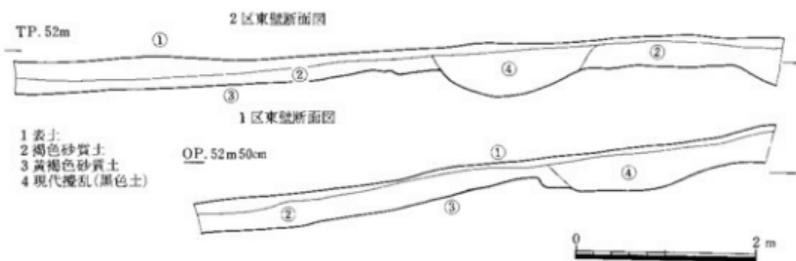


図-48 A区土層断面図

調査概要

調査地は、玉手山丘陵先端に築造された玉手山1号墳の前方部前面部分（A区）と前方部東傾斜面（B区）の2ヶ所であり、A区は7×33mの細長いトレンチを前方部前面に沿って設定し、B区は前方部主軸に平行する長さ45mの崖面を調査した。

1 A区の調査

基本層序 上層より表土・褐色砂質土・黄褐色砂質土の順で堆積している。遺構検出面は、黄褐色砂質土上面である。

遺構 検出した遺構は、集石3カ所・土器棺2ヶ所・ピット1ヶ所である。ピットは、集石1を切っており、ピット内より土師器の杯（1～8）他が出土した。

集石1は、東西1.1m、南北0.7mの範囲内に10個の石を配する。集石内からは、須恵器の壺（13・15）蓋と土師器の高杯が出土し、8世紀を中心とする時期のものと考えられる。集石2は、東西1m、南北1mの範囲に石30個を配す。集石内に散乱していた遺物は、須恵器の壺（12）と土師器の片口鉢である。集石3は、4個体の石材が直径70cmの範囲内にある。出土遺物なし。土器棺1は、集石群から西へ30m離れた地点にあり、土師器の羽釜（14）である。墓壇は、検出できなかった。土器棺2は、土師器の把手付鉢と須恵器の杯（10）からなる。墓壇は、明確にされなかった。

包含層、褐色砂質土、茶褐色土から、須恵器の蓋（11）・壺（16）・壺と土師器の鉢・壺・杯・小型高杯（9）と弥生土器が2片出土した。土師器類は、磨滅しており、保存状態が悪い。

2 B区の調査

基本層序は上層より表土・淡褐色土・黄褐色土（地山）となる。地山は、定ヶ城累層でサヌカイトの原石を少量含む。遺物は、淡褐色土に多量の円筒・朝顔形埴輪片が認められ、淡褐色土が古墳の盛土の流出土と思われる。

3 A・B区の遺物

A区の上出遺物は、土師器（1～9・14）・須恵器（10～13・15・16）と瓦片・サヌカイト剥片・埴輪がコンテナ4箱ある。

土師器の皿は、法量によって、口径8.3cm、器高1.7cmのもの（1～4）と口径10.3cm、器高1.7cm前後のもの（5～8）の2種類がある。小型高杯（9）は色調が橙色を呈する供献用土器である。羽釜（14）は、羽釜棺に転用されたもので、細片となっており、かろうじて図化できる。胎土は、雲母・角閃石を含む、いわゆる生駒山地西麓産の土器である。

須恵器は、杯（10）、蓋（11・12）、短頸壺（13・15）、壺（16）が認められる。杯は、口径14cm、器高4.5cmを測る。蓋は、かえりのないもので口径11.5cmのもの（11）と口径15cmのもの（12）がある。短頸壺は、有蓋のもの（13）と無蓋のもの（15）の2種類ある。壺は、口縁部のみで口縁端部を下方へ拡張する。調整は、外面をタタキの後、ナデで消している。

埴輪は、細片となっており図示できるものではない。種類は、朝顔形埴輪と円筒埴輪が出土している。円筒埴輪片は、外面にタテハケで調整後に横ハケを施す。内面は、左上りのハケで調整する。焼成は、黒斑を有するものがある。時期は、細片のため不明である。

各遺物の時期は、1～8が13世紀、9・14・15が7世紀後半、10～13が8世紀中頃と考えられる。

また、B区の埴輪も細片となっており、タガの部分を残すものと、体部片のみで磨滅し、保存状態が悪いものがある。出土状況も散在的で、口縁部分が多く認められ、基底部分が認められないことから、1号墳の埴輪は、原位置を保っていると考えられる。

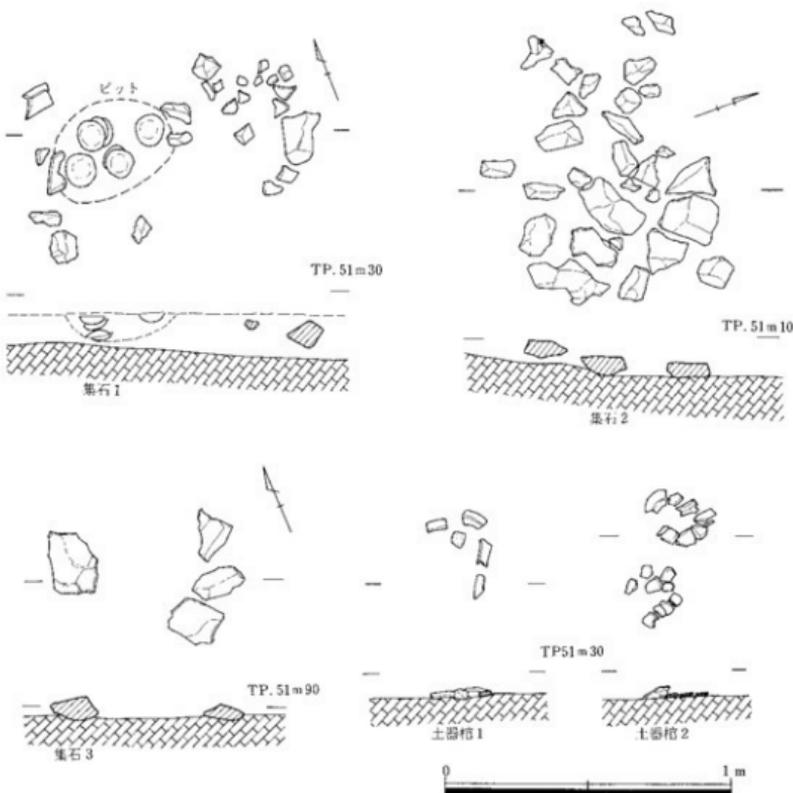


図-49 集石・土器棺実測図

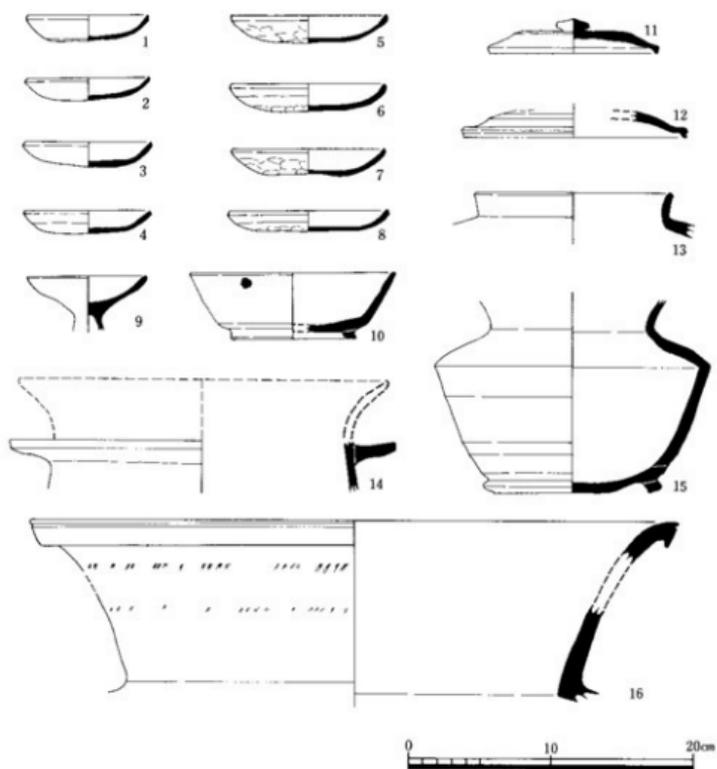


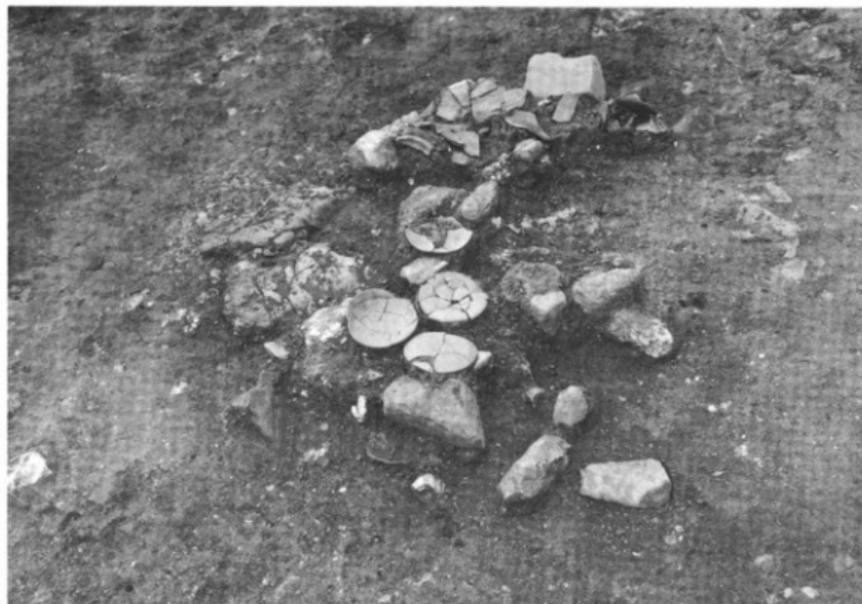
图-50 A区出土土器実測図



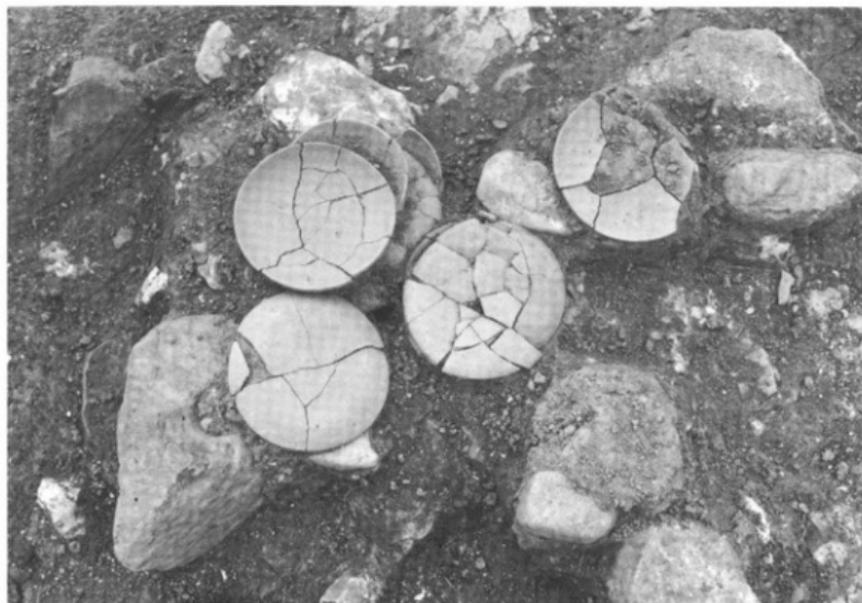
A区全景（東から）



集石1・2（東から）

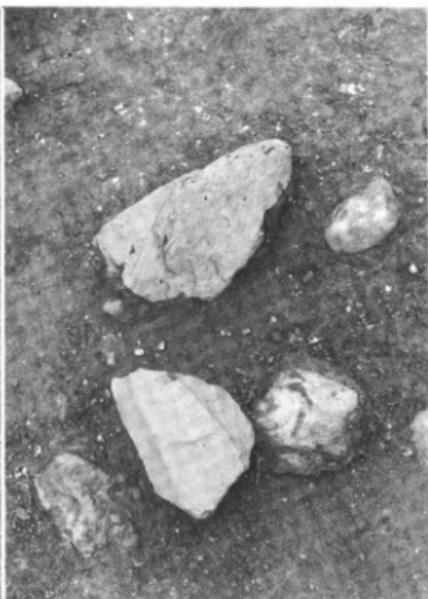


集石 1

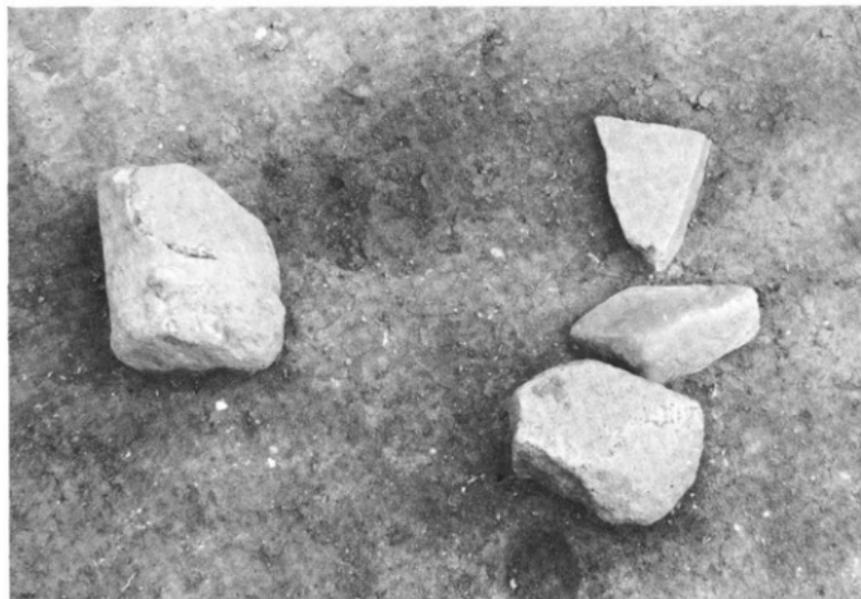




土器棺 1・2



サヌカイト剥片出土状況



集石 3

6. 82-11次調査

- ・調査地区所在地 柏原市円明町217-69
- ・調査担当者 安村俊史
- ・調査期間 1982年9月28日～10月6日
- ・調査面積 30㎡/1505㎡

北部柏原工業団地協同組合共同施設建設に伴う緊急発掘調査。草刈りの後、三箇所にトレンチを設定し、調査を実施した。調査地は玉手山丘陵の南端、西へ派生する小丘陵の北側斜面にあたり、周辺で旧地形を留める唯一の地である。調査地の北東30mには、式内社伯太姫神社が鎮座する。

各トレンチでは、地表下0.4～1.5mで黄褐色粘土の地山が検出された。地山の標高は、トレンチ南端でTP40m前後、北端でTP39.5m前後を計る。遺構・遺物が発見されたのは、第2トレンチのみであり、以下、第2トレンチについてのみ記述する。

第2トレンチでは、地山上の第5～9層が、いずれも北下りの傾向を示す無遺物層であり、自然堆積と考えられる。第5層の上面から土壌状に切り込む褐色粘質土が二箇所で見られるが、無遺物であり、時期、性格は不明である。第2・3層は、人為的な盛土であると考えられる。

遺構は溝2、土塊状遺構1、ピット2を検出した。溝-1は土塊状遺構の南側に平行し、土塊状遺構に伴うものと考えられる。幅は西端で60cm、東端で80cm、深さは50cm前後である。溝底面での東西の比高差はみられない。溝内から羽釜・土師器小皿が出土している。この溝-1をはさみ、ピットが2個存在した。いずれも直径20cm、深さ10cm前後のもので、一対をなすと考えられる。環状の遺構と考えられるが、小規模な橋のようなものも想定できる。いずれにしても、その痕跡は顕著でない。両ピット間の距離は1.1mである。

土塊状遺構は幅50cm、高さ10cm前後、褐色土を盛ったものである。土塊状遺構の直下に、溝-2が存在する。幅20cm、深さ10cm前後、溝断面は鋭い凹状となるため、木樋のようなものの存在が考えられる。更に、溝-1の北側で地山が約5cm垂直におちるので、その上に板を置き、土塊状遺構が築かれたと考えられる。すなわち、溝-2は木組みの暗渠と考えることができる。しかし、木材が一片も確認されなかった点に疑問が残る。

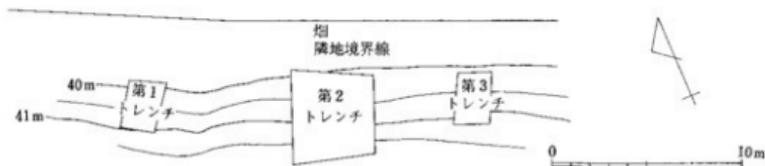


図-51 トレンチ位置図

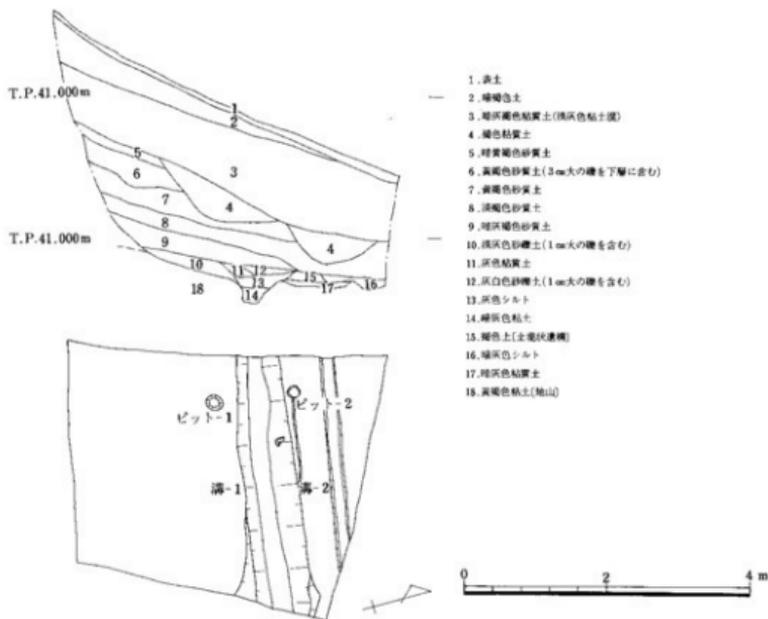


図-52 第2トレンチ遺構図

遺物は羽釜・土師器小皿のほか、瓦等が出土している。瓦質羽釜(1)は、溝-1内から出土、口縁はやや内傾し、口縁端部は方形状をなし、鈔はやや上向きとなる。口縁外面に3条の浅い凹線がめぐり、口縁・鈔は横ナデ、内面ナデ、外面体部はヘラケズリ、煤が付着する。土師器小皿(2～6)は、すべて口縁部横ナデ、外面および外面底部をナデ、指頭押圧によって調整する。歪んだものが多い。(3)は内面に直径約1mm、褐色・半透明の細長い植物らしき物質(海草か?)がはいっており、土師器小皿(2)によって蓋をされていた。(4)は溝-1内出土、他は溝-1南側の斜面上から出土。

その他の遺物として、表土直下から南録二朱銀が出土した。縦2.2cm、横1.3cm、厚さ0.2cm。両面周囲に卍形の浮文が連続してめぐり、表に「以南録八片 換小判一両」裏に「銀座常是」と「定」の文字がある。側面は、やすり状の工具でやや粗雑に仕上げられている。南録二朱銀は、安永元年(1772)～天保元年(1830)にかけて鑄造された上質の銀銭で、銀の含有率は97

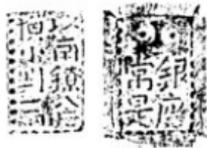


図-53南録二朱銀拓影(原寸)

%以上という。金貨の単位が表記された最初の銀貨であるが、寛政二年（1790）に、あまり通用していないことを戒める御触書が出されるなど、江戸時代の経済政策の混乱を示す遺物でもある。調査では、江戸時代の遺物がほとんど発見されていないうえ、表土直下から出土しているので、どのようにしてこの地に紛れこんだのか不明である。

各遺構の時期は、出土遺物からほぼ同時期と考えられるが、溝-2は無遺物であり、その他の遺構に先行するとも考えられる。遺構の性格については十分把握できなかったが、二通りの解釈が可能である。一つは調査地北側が現在平坦地となり、畑として利用されているので、この平坦地での居住、あるいは農耕を営む際に、斜面地からの流水を防ぐ目的で溝、土堤が築かれたと考えられる。いま一つは、溝-1の南側斜面から瓦質羽釜片、土師器小皿片が十数点出土しており、溝-1内の遺物は、これらの一部が転落したものと考えられ、羽釜、土師器小皿以外に土器が見られないこと、土師器小皿（2・3）がセットとなり、中に植物らしき物質が存在したことなどから、この斜面地は墓地、あるいはなんらかの祭祀の場であったと考えられる。遺構はこの特別な区画を限るものであったのかもしれない。あるいは、両者の性格を兼ね備えていたとも考えられる。更に、伯太姫神社の参道に近いことを考慮するならば、神社となんらかの関係を有しているのであろう。しかし、溝-2、あるいは、堰状遺構の性格を考えると不明瞭な部分が多いと言わざるを得ない。

建築物は、調査地に盛土を築き、遺構面に影響が及ばないように施工するよう指示をした。

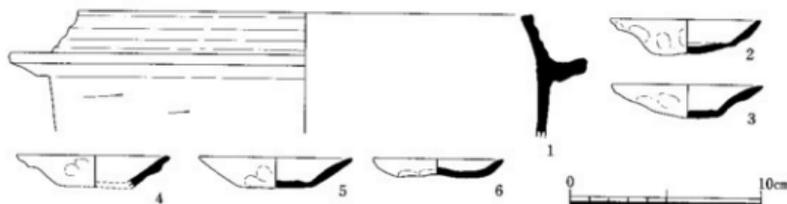
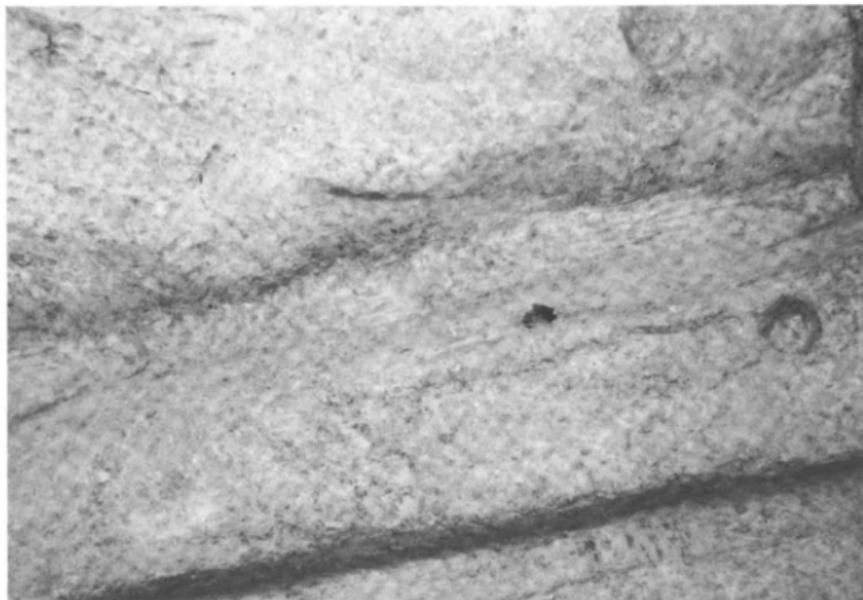


図-54 出土土器実測図



溝1・2・ピット1・2



土師器小皿出土状況

7. 82-12次調査

・調査区所在地	柏原市旭ヶ丘・円明町
・調査担当者	安村俊史
・調査期間	1982年10月7日～11月27日
・調査面積	300㎡/44828㎡

柏原市円明町に（仮称）国分第二中学校建設予定地として造成計画があり、予定地内に玉手山9号墳が含まれていたため、柏原市教育委員会と造成業者（東洋総業株式会社）との協議の結果、まず、古墳の範囲と残存状況を確認するため、公費による緊急発掘調査を実施することになった。これは、あくまでも保存を目的とした調査であり、トレンチによって古墳の範囲確認、石室、埴石、埴輪等の残存状態を確認することを主眼とした。

玉手山9号墳は、過去の造成で東側約3分の1が既に削られており、調査以前は埴石・埴輪の遺存が窺われたが、予想以上に良好な状態であった。

古墳は、大阪層群の地山を削り出して整形した後、後円部には若干盛土を行っている。古墳は全長約64.6m、後円部直径約33.2mと復元できるが、トレンチ調査であるため数値は多少前後すると思える。墳形は、前方部がくびれ部から広がらずに直線的にのびる、いわゆる柄鏡形と考えられるが、地山の形状から前方部がバチ形に開く可能性も残している。いずれにしても、典型的な前期古墳の墳形である。

埋葬施設は、後円部に盛土を築いた後、墳頂部にほぼ真南北に堅穴式石室が築かれている。墓壇は地山まで掘り込んだ後、やや平坦面を有し、更に約2mの深さまで地山を掘り込み、二段掘の形状をなす。石室は過去に数回の盗掘を受けており、残存状態はあまり良好ではない。石室内法の長さ約558cm、幅は北端で128cm、南端で92cmの台形平面をなす。床面に2～5cm大の礫を約20cm敷きつめ、壁体として扁平な安山岩の割石、もしくは自然石を4～5段、約30cm積みあげる。そして床面に薄い安山岩の割石を敷き、その上に粘土棺床を設置し、割竹形木棺を置く。その後、壁体を約1.2mの高さまで積みあげている。石室を構築する間、数回にわたって朱が塗抹されている。粘土棺床と壁体の関係、壁体下部と上部の積み方の相違などから、粘土棺床よりも壁体下部が先に築かれたと考えているが、通例とは逆であり、疑問の余地を残している。また、大部分の石材は安山岩であるが、緑色結晶片岩が少数見られる。小片が多く、石室床面付近に多いので、宗教的、あるいは政治的な意味があるのかもしれない。

石室南端から南へ伸びる排水溝も検出された。幅約50cm、底部には小礫が厚く敷かれている。排水溝の南端は、くびれ部付近の墳頂部に至る。

副葬品は鉄剣先の小片が検出されたのみである。（4）残存長9cm、幅2.8cm、厚さ1.1cm、断面は菱形を呈し、表面に木目の痕跡が残っている。

埴石は、後円部・前方部で一部基石が残っているのを確認し、くびれ部では、かなり原

形を留めていた。基石は20~30cm大の大形の石を使用しており、斜面の葺石は10~15cm程度の小型の石を使用している。いずれも河原石である。くびれ部では、葺石の外側に平坦面がありその部分にやや小さめの石を敷きつめたテラス状の遺構が検出された。例のない敷設であり、祭祀の場か、中期中古墳の造り出しの前身のようなものかもしれない。このテラス状遺構がどの範囲にまでおよぶのか明確にできなかったが、その性格が目される。

埴輪はくびれ部で原位置を留めているものを4基確認した。各埴輪は2.8m間隔を保っている。埴輪は直径30~40cmの円筒埴輪と考えられるが、高さは10cm程度しか残っておらず、本来の高さ等は不明である。円筒埴輪は器壁が約6mmと非常に薄のが特徴であり、山形、弧形の文様を施すものもある。(1・2)また、器壁が約1cmの朝顔形埴輪と考えられる破片がある。この種の埴輪は、胴の張り出した部分に2本の凸帯がめぐり、その間に「く」の字形の連続文が見られる。(3)いずれも玉手山古墳群周辺では類例が知られていない。

また、埴輪の中間位置に直径約40cm、深さ30~40cmのビットが3箇所確認された。このビットには、木製品、例えば烏・蓋・盾等の模造品、もしくは実物が立てられていたのではないだろうか。形象埴輪は、本来は実物であったものが仮器化されたものであると考える説があるが、本古墳では形象埴輪の破片が全く発見されず、この仮説を証明するものといえるかもしれない。

土器は、くびれ部のテラス状遺構上面で小型丸底壺が1点発見されたのみであり、時期は断定し難い。

玉手山9号墳は、副葬品が残存しなかったうえ埴輪の偏年的位置づけが困難であり、4世紀後半代という漠然とした年代を与えることができるのみである。本古墳は当初保存される予定であったが、保存すると学校建設に支障をきたすため、何らかの方法で古墳を復元するという条件つきで、

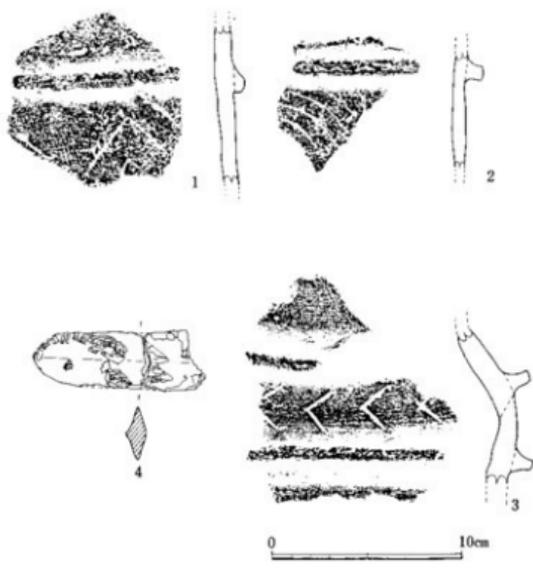


図-55 玉手山9号墳出土遺物実測図

全面調査の後、破壊することになった。具体的な復元方法は目下検討中であるが、全面調査によって、範囲確認調査の際に明らかにできなかった点を解明していきたいと考えている。今回の調査の本報告も、全面調査終了後、まとめて報告することにする。

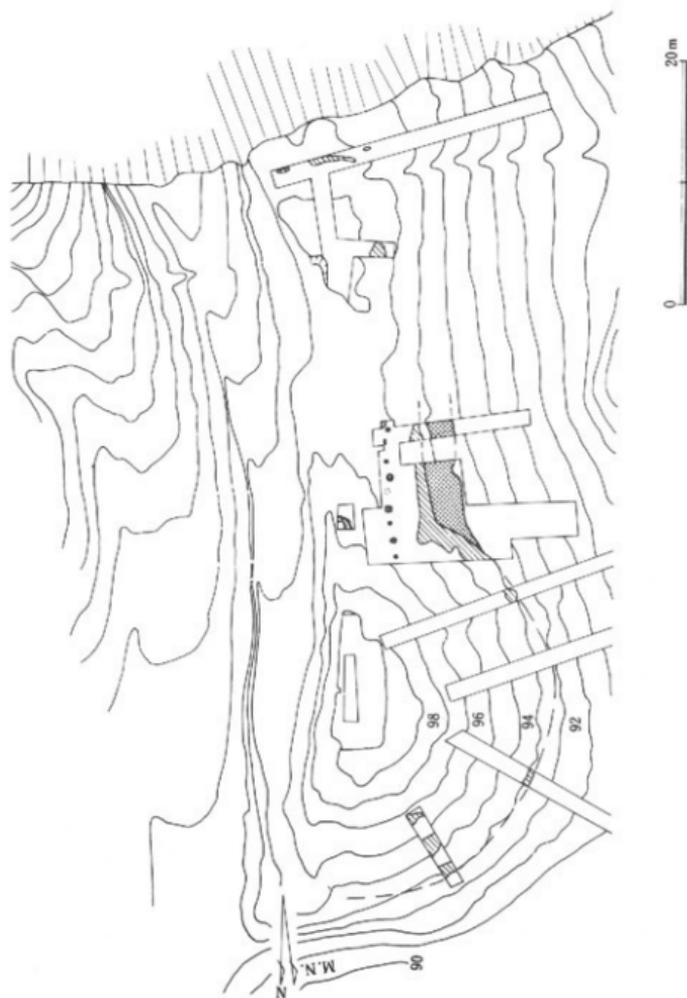


図-56 玉手山9号墳填丘図（斜線は基石残存部・網目はテラス状遺構を示す）



図-57 玉手山9号墳西側くびれ部葬石平面図

船橋遺跡

船橋遺跡は、年々、大和川の流水によって浸蝕されており、河床という性格上、保存の措置は構じられていない。また、盗掘等による破壊も、しばしば行われている。そこで、船橋遺跡の現状を把握し、盗掘を防ぐために、巡回を実施すると共に、1982年5月、50m間隔の杭を打ち、その後、500分の1の平板測量図を作製した。

1982年8月上旬、台風等による豪雨が続き、大和川は増水し、河原も完全に冠水してしまった。水量が減少した後、巡回を2回行ったが、遺跡表面が流水によって数箇所えぐられ、遺物包含層が一部露出していた。また、河岸は増水した水によってえぐられ、遺物が散布しているだけでなく、断面で遺構が確認された。そこで、遺物表採、平板測量図に採集地を記入、遺構断面図作製、記録写真撮影を行った。

遺構は溝あるいは土壇と考えられるものが、C地点付近で7箇所確認された。いずれも、無遺物の暗黄褐色粘質土上面から掘り込まれており、現在の表土直下に存在する。大部分は暗灰

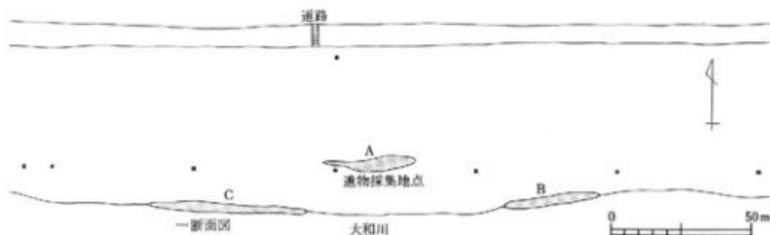


図-58 平板測量図

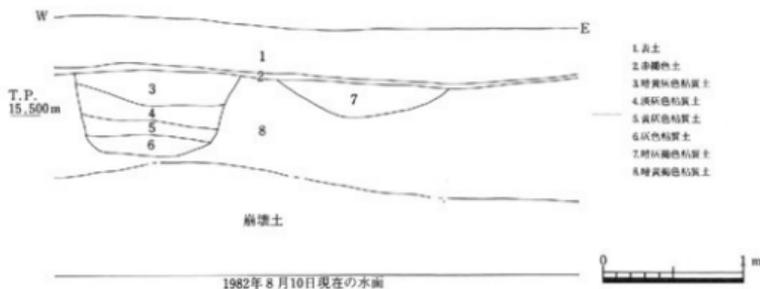


図-59 河原断面図

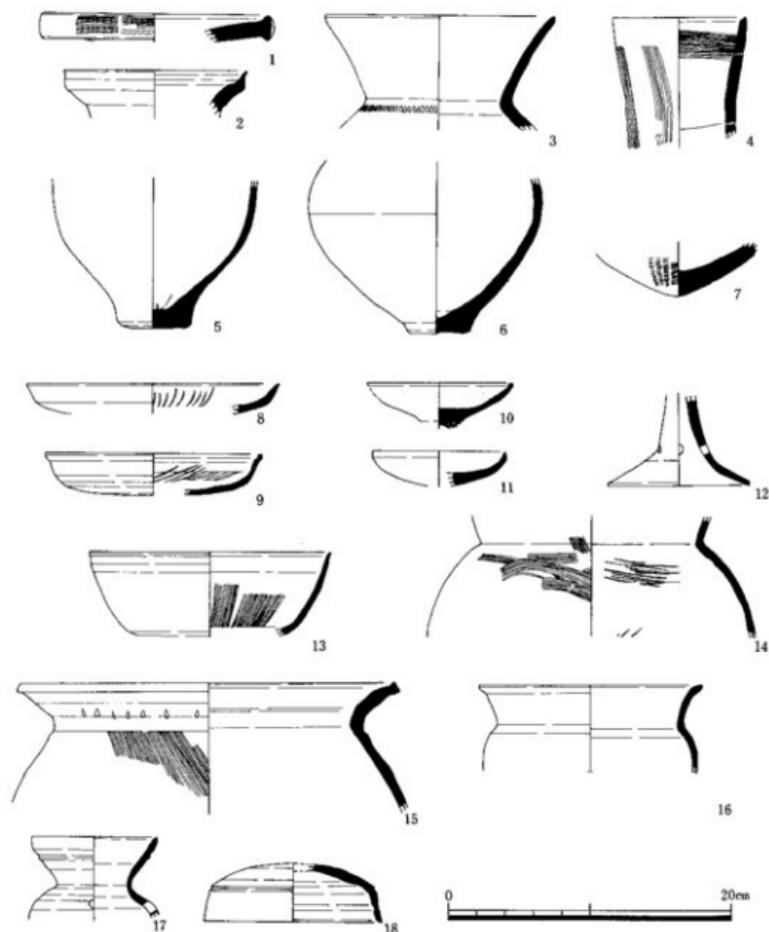


図-60 表採土器実測図

褐色粘質土を埋土とし、土師器、須恵器等の細片を含む。遺構を掘ることができないため、時期決定は困難であるが、6～7世紀代の須恵器を含んでいる。

現在のままでは、船橋遺跡はいずれ消滅してしまうことだろう。それを少しでも保存し、できる限り記録に留めておくことは重要な責務である。今後も折にふれ、平板測量、遺物表採等を実施することによって、保存の一助となるべく務めていきたい。

(安村)

ま と め

柏原市内の遺跡を下記の5区に大別し、それぞれの区について調査担当者の討議の結果を以下のようまとめた。

- 第1区 田大和川の左岸にあたる、船橋遺跡、本郷遺跡の範囲。
- 第2区 田大和川の右岸、生駒山地西麓部にあたる、山ノ井遺跡、平野遺跡、大泉遺跡、大泉南遺跡、太平寺遺跡、安堂遺跡の範囲。
- 第3区 生駒山地南端部、東山地区と称する、平尾山古墳群、高井田横穴古墳群の範囲。
- 第4区 玉手山丘陵を中心とする、玉手山古墳群を含む玉手山遺跡と誉田山古墳群の範囲。
- 第5区 明神山地から田辺・国分市場までにあたる、田辺古墳群を含む田辺遺跡、松岳山古墳群の範囲。

第1区

本年度は船橋遺跡内における発掘調査はまったく実施されなかったが、大和川河床部にあたる同遺跡は、破壊、消滅の危機にさらされている。しかし、現在でも遺構、遺物包含層が残っていることが確認され、本文中に示したように、今後とも保存のために努力していかねばならない。現在、大和川護岸工事のため、船橋遺跡にも一部盛土が行われている。この盛土工事が遺跡の破壊に結びつかないように注意していかねばならない。また、無意味な表採、盗掘等は厳重に対処していきたい。本書を読まれた方々は、興味本位のこれらの行為が貴重な遺跡を破壊する行為であることを十分に認識していただきたい。

本郷遺跡では、遺物包含層及び遺構面が現地表面から2～3m下層と考えられ、本年度は立会調査のみであり、成果はなかった。しかし、1981年度の調査によって、縄文晩期以降の複合遺跡が改めて確認されている。市内では、当地の遺跡の実態が十分に把握されておらず、船橋遺跡と共に、今後とも注意していかねばならない地域である。

第2区

柏原市域の生駒山地西麓部は従来から、複合遺跡として注目されていたが、調査が進むにしたがい新発見が種々得られたので、これらについて概略する。

この地域で時期的に最も遡りえる皿左として、旧石器時代に属する国府型ナイフ形石器1点、有舌尖頭器2点の出土があった。いずれも、二次堆積土中からの出土ではあるが、この時期の遺跡が山麓に位置していたと考えられるので、以後の調査についてはこころする必要がある。

縄文時代については、旧大和川対岸の国府遺跡、船橋遺跡、本郷遺跡が周知されていたが山

麓の中心部に当たる大泉遺跡から、今回、山形押型文土器が出土したことは有舌尖頭器との関連もあり、特筆に値するものといえる。また、同遺跡からは中期、後期、晩期の遺物が出土しており、縄文時代自体でも時期的複合遺跡であることが判明した。

弥生時代についてみると、大泉遺跡で前期～後期の遺物が出土しているが、その他の遺跡では中・後期の遺物のみが出土している。同時期における集落の在り方についての資料を提供するものと考えて、将来、資料が蓄積されることに期待したい。

古墳時代については、後期古墳の石室が破壊され、僅かにその痕跡を留めるのみである状況で検出された例が数基ある。近年のみでなく、寺院建設に伴う時期に破壊されていることが知られたことは古墳築造者と寺院建設者の間における勢力の変化を物語るものであろう。また、大泉遺跡で掘立柱建物、配石遺構、炉跡に伴って、鉄滓、籾羽口、炭等が6世紀代の須恵器、土師器と共に多数出土した。出土地点が禰比古神社の参道内であることから同神社名との関連やこの時期の鉄製品生産に関して問題を提起するものと思われる。

寺院跡については、続日本紀に記載されている河内六寺のうち、寺域が把握されているものは鳥取寺跡、智識寺跡で、その他は屎瓦の散布、一部礎石の遺存が知られるのみである。大泉南遺跡は山下寺跡を包括するもので、「小字 堂の内」の地を山下寺跡とみて、発掘調査した。寺院跡に連なる建物遺構は検出されなかったが、2次堆積土中から大量の屋瓦片の出土をみたことは同寺の遺構が近隣の地に存するものと認められる。

平安時代以降については、大泉南遺跡で同時期の遺物として多量の日常雑器の出土が認められる。同遺跡からは鎌倉・室町時代の掘立柱建物、土壇、溝等の遺構が検出されているが、調査面積の関係からその全貌を明確に把握するにいたっていない。

生駒山地西麓の谷口扇状地では、寺院跡地を中心として村落が発展していることからみて、この時期の遺構は、現在の集落の下層に眠っているものと考えられる。

第3区

第3区は、日本最大の平尾山古墳群に代表される後期古墳の密集地である。本年度は関西電力の鉄塔建設に伴う調査で、数基の古墳を調査した。新発見の古墳も4基確認され、うち1基は発掘調査を実施した。この古墳はふどう畑内に存在し、現地形からは古墳の存在が全く予想されない場所であったが、調査が進むにつれ、天井石を取り去り、土砂で完全に埋められた石室が検出された。幸い、鉄塔の位置を変更する等の処置がとれたので、古墳の保存をはかることができた。石室内の副葬品を取り出し、石室石材を石垣等に転用することができるため、開墾に際して古墳は好都合だったようで、ふどう畑の開墾に伴って、かなりの古墳が破壊されたようである。現在、古墳が確認されていない地にも、古墳の痕跡が残っていることも考えられ、今後の調査にあたっては充分注意する必要を認めた。

昭和57年9月4日付け、読売新聞の夕刊に「豪雨禍で古墳ピンチ」のタイトルで、平尾山南峰古墳の羨道部割石の倒落石が、あたかも、昭和57年8月の集中豪雨によるもののごとく報ぜられた。しかし、この倒落は昭和56年10月に柏原市教育委員会の遺跡パトロールにより確認され、大阪府教育委員会文化財保護課に連絡し、同課山中和弘技師が現地を視察され、その保護策の策定中のものであった。また、隣接する地では、「農園用地」と称して宅地の造成が実施されており、大阪府教育委員会文化財保護課から幾度も視察があり、現状は十分把握されているものである。柏原市内では、三基しか確認されていない古墳であることからして、土地所有者との関連もあり、対応に困難さも認められるが、早急に保護の手を施す必要のあることは事実である。

第4区

82-6次調査で国府型ナイフ形石器等が出土し、玉手山丘陵上に旧石器時代から人間が生活していたことが確認された。縄文時代の遺物は未確認であるが、弥生時代になると、丘陵北端付近で少数ではあるが、前期以降の遺物が認められる。本年度は遺構は検出されていないが、過去には住居址も確認されている。

古墳時代では、82-10次調査で玉手山1号墳の裾部が調査された。また、仮称国分第二中学校が建設されることになり、その敷地内に含まれる玉手山9号墳の範囲確認調査を実施した。この調査は、あくまでも保存を前提としたものであり、9号墳の範囲確認、残存状態確認のための調査であった。その結果、墳丘、石室の規模が確認され、墳丘基底部のテラス状遺構、地輪列、および地輪列中のビット等、全国でも例を見ない貴重なものが次々と発見された。再三にわたる協議の結果、9号墳の保存は不可能ということになり、なんらかの方法で古墳を復元するという条件のもとに、全面調査を1983年2月より実施することになった。本書では、範囲確認調査の概略のみを報告し、本調査終了後、一括して報告することにする。

同じく玉手山古墳群内の玉手山8号墳は、これまで未調査であるが、1982年8月の豪雨によって8号墳下の丘陵西斜面が地崩れをおこし、8号墳の墳丘も除々に崩れだした。現在、前方部はほぼ崩壊し、人が近寄ることもできない状態である。崩壊部の断面には、埋葬施設等は見られないが、保存が手遅れになってしまったのは残念である。

また、82-5・6次調査によって前方後円墳の周濠かと思える遺構が検出された。5世紀中葉から末葉と考えられる土器・埴輪が出土しており、2～3時期にわかれる可能性も考えられる。また、片山庵寺塔跡の調査でも5世紀後葉の埴輪が発見されており、玉手山丘陵北端付近では、古墳時代前期だけでなく、中期にかけても、引き続き、古墳が築造されていたことが判明している。

これらの調査以外に、市民から玉手山東横穴から出土したといわれる陶棺2基の破片を寄贈

していただいた。安福寺横穴と共に、玉手山東横穴にも陶棺が利用されていたと考えられる。

寺院址では、片山庵寺と五十村庵寺が調査された。片山庵寺では、塔跡の凝灰岩基壇が良好な状態で遺存していた。藤原宮跡出土瓦と同范の複弁蓮華文軒丸瓦が出土しており、創建は西暦700年前後と考えられる。五十村庵寺は本年度に報告する予定である。

片山庵寺塔跡周辺では、7世紀から8世紀にかけての遺物が大量に発見されており、寺院を建設した氏族の生活を示すものと考えられる。今後、住居址の発見、居住域の確認、安福寺横穴群との関係を考えていかなければならない。

中世になると、13～15世紀の土器が見られ、墳墓、祭祀遺構かと思える遺構が検出されている。

玉手山丘陵では、過去におどう畑開墾の際に地形がかなり改変されており、さらに最近の宅地造成等による大規模開発によって、遺跡はかなり破壊されているようである。しかし、82-3次調査のように、遺構が残っている可能性も考えられ、慎重な調査が要求される。また、本年度の調査は丘陵部のみであり、今後、丘陵裾部、あるいは原川、石川の自然堤防上の遺跡を確認する必要がある。

誉田山古墳群の調査は、本年度は実施されていない。

第5区

本年度田辺遺跡の発掘調査件数は、10件を数える。この内、国庫補助対象の発掘調査は、8件である。主な調査内容は、次の通りである。

田辺庵寺と関わる時期の調査として、82-7調査区では、昨年度以来当地区での遺構は明らかでなかったが、建物の柱穴が検出され、その遺存状態が良好なところから、今後の調査が期待できる。建物の規模は、調査面積が狭少なため不明であるが、同調査区より直ぐ南の82-9調査区では、同時期の井戸が検出され、その中から円面硯が出土している。当時の生活の一端をうかがえる遺品である。

82-6調査区では、特に史跡指定地内の調査であり慎重を期した。田辺庵寺東側回廊が検出されると予測されたが、その遺構については何ら検出されなかった。この事により、回廊はさらに東側の方に存在する可能性が高くなった。建物の建築については、遺構保存や設計変更を前提として調査に入ったもので、調査後は盛土を施す事を条件とした。

この他、82-4調査区では、遺構は検出されなかったが、中世の遺物を検出した。田辺遺跡の集落内では普遍的に発見される時期であり、今後その遺構の検出が期待される。

田辺庵寺東側にあたる丘陵において2件の原因者負担の調査が行われ、新知見を得た。1つは、新しい古墳群とそれに続く墳墓群の発見である。これまで全く発見されなかった古墳群であり、色々な面から多くの問題をかもし出した。出土遺物から田辺史一族が被葬された可能性が高く、古墳の規模や形態あるいは古墳から墳墓への変遷過程を如実に示す好資料である。

このように今まで知られなかった古墳群が発見され、田辺庵寺の東側に在する国分尼寺、国分寺の各寺跡の裏山にあたる丘陵上に同様の墓域が存在する可能性が高くなった。今後、注意していかなければならないだろう。いま1つは、この古墳群の北側から多くの遺構や遺物を検出したことである。遺構では、堅穴住居が2軒、土壇2、溝2、建物のピット群を検出した。時期はさまざまであるが、堅穴住居は、畿内では一番新しい時期を示すものである。この住居は、玉類の製作に使用した砥石が出土し、田辺庵寺や古墳群との関わりが注目される。さらに、出土遺物の中には、旧石器時代のサヌカイト製翼状剥片や縄文時代の石鏃があり、これらの時期についても、今後注目されるであろう。



图-61 柏原市内遺跡地図

柏原市埋蔵文化財発掘調査概報

1982年度

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729) 72-1501 内 716

発行年月日 昭和58年3月31日

印刷 株式会社 K. K. 中島弘文堂印刷所

